

た ばた みなみ どう い せき
田端南堂遺跡

児玉郡酪農業協同組合集送乳・牛乳処理施設建設工事
並びに道路改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

2010

本庄市遺跡調査会

序

本庄市は、かつて中山道一の繁栄を誇った宿場町として、また、国学者塙保己一誕生の地として広く知られるところです。そうした歴史的な背景と文化的風土を持つ本庄市は、また多くの埋蔵文化財にも恵まれ、市内には旧石器時代から近代に至るまでのさまざまな遺跡が分布しています。

本書は平成6年及び7年に、児玉郡酪農業協同組合による集送乳・牛乳処理施設建設並びに道路改良工事に伴う事前の記録保存を目的として実施した、本庄市児玉町田端に所在する田端南堂遺跡の発掘調査の成果を記録したものです。調査区内からは、古墳時代前期の集落を構成していた堅穴住居跡や、土坑・溝址など数多くの遺構が検出され、貴重な資料を得ることができました。また、検出された2軒の堅穴住居跡からは炭化した部材等も出土し、共に火災を被ったものであることが判明しました。これらの火災が、他所へ移動する際の儀礼に係るものか、または失火によるものかは今後の課題となりますが、調査されたうちの1軒の床面からは、据え置かれていたままの状態の、当時の生活に使われていた土師器の良好な一括資料を得ることができました。

このような貴重な文化遺産を長く後世に伝えていくことは、現代に生きるわたしたちに与えられた責務であり、歴史を明らかにすることはよりよい未来を築くための手掛かりとなるものです。今後は本書が学術研究の発展に寄与するとともに、生涯学習の場に広く活用されることを願ってやみません。

最後になりましたが、発掘調査の実施から報告書の刊行に至るまで、文化財の保護に対する深いご理解とご尽力を賜りました児玉郡酪農業協同組合をはじめ、関係諸機関ならびに関係各位、さらに住民の皆様の多大なるご協力を賜りましたことを、心より厚く御礼申し上げます。

平成22年9月

本庄市遺跡調査会

会長 茂木孝彦

例 言

1. 本書は、埼玉県児玉郡児玉町大字田端字南堂235外に所在する田端南堂遺跡（県遺跡No. 54-325）の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は、児玉郡酪農業協同組合集送乳・牛乳処理施設建設工事並びに道路改良工事に伴う事前の記録保存を目的として児玉郡酪農業協同組合より依頼を受けて児玉町遺跡調査会が実施したものである。
3. 発掘調査の期間は、第1・2区を平成6年1月28日から5月13日に、第3区を平成7年10月13日から12月2日まで実施した。
4. 埼玉県教育委員会教育長からの指示通知は平成6年2月16日付け教文第2-194号である。
5. 発掘調査の担当は鈴木徳雄の指導のもと尾内俊彦が行い、一部を大熊季広が補助した。
6. 報告書刊行のための整理作業および報告書作成作業は整理参加者の協力を得て大熊季広・和久拓照があたった。
7. 本書の編集は整理参加者の協力を得て大熊季広があたり、各執筆担当については各文末に記した。
8. 発掘調査および本書作成にあたって下記の方々や諸機関より御助言・御協力を賜った。記して感謝いたします。（順不同、敬称略）

赤熊浩一、石坂圭介、猪股麻紀、江原昌俊、太田博之、岡 稔、岡本幸夫、金子章男、小宮山克巳、坂本和俊、佐藤雅一、佐藤幸恵、齋崎 潔、白崎智隆、新開基史、外尾常人、田村 誠、塚田泰司、永井智教、中沢良一、長滝歳康、中平 薫、橋本充史、長谷川勇、東野豊秋、平田重之、舟木 聡、逸見恵大、増田一裕、丸山 修、丸山陽一、松本直也、宮島秀夫、宮本直樹、矢内 勲、埼玉県教育局生涯学習文化財保護課、児玉郡市文化財担当者会、東海大学考古学研究会

9. 本書に関する資料は本庄市教育委員会が管理・保管する。
10. 本書作成にかかる主たる作業は、調査担当者および下記の者が行った。
福島礼子、倉林常子、新井嘉人、恋河内昭彦、桜井和哉、田口照代、半澤 健、半澤利江、山崎一男

遺跡調査会の組織

平成5・6年度(発掘調査)		児玉町遺跡調査会
会長	富丘 文雄	児玉町教育委員会教育長
理事	田島 三郎	文化財保護審議委員長
	清水 守男	文化財保護審議委員
	武内 和雄	〃
	野口 敏雄	〃
	永尾 憲二	総務課長
	高橋 寛	産業課長
	山口 雄和	土地改良課長（都市計画課長 平成6年度）
	山口 忠一	〃（平成6年度）

	木村 和雄	土木課長	
	塚越 政次	都市計画課長	
	大塚 勲	社会教育課長	
監事	小島 和子	文化財保護審議委員	
	安久沢 一	企画財政課長	
幹事	吉川 敏男	社会教育課長補佐	
	岩上 高男	〃	
	関根 安男	〃	(平成6年度)
	清水 満	社会教育係長	
会計幹事	田島 賢二	〃	主任
	倉林美恵子	〃	主事
	恋河内昭彦	〃	文化財係主事
	徳山 寿樹	〃	
担当	鈴木 徳雄	〃	主任
	大熊 季広	〃	主事補 (平成6年度)
調査員補	尾内 俊彦		

平成22年度(整理・報告) 本庄市遺跡調査会

会長	茂木 孝彦	本庄市教育委員会教育長	
理事	清水 守雄	本庄市文化財保護審議委員	
	腰塚 修	本庄市教育委員会事務局長 (会長代理)	
監事	八木 茂	本庄市監査委員事務局長	
	田島 弘行	本庄市会計課長	
幹事	金井 孝夫	本庄市教育委員会文化財保護課長 (事務局長)	
	鈴木 徳雄	〃	副参事兼課長補佐
	太田 博之	〃	埋蔵文化財係長
	恋河内昭彦	〃	埋蔵文化財係主査
	大熊 季広	〃	埋蔵文化財係主査
	松本 完	〃	埋蔵文化財係主任
	松澤 浩一	〃	埋蔵文化財係主任
	の野 善行	〃	埋蔵文化財係臨時職員




凡 例

本書に掲載した遺構図、遺物実測図および観察表などの指示は以下のとおりである。

1. 遺跡・全測図などにおけるX・Y数値は平面直角座標第1X系（原点：北緯36度00分00秒、東経139度50分00秒）に基づく各座標値を示す。また矢印の方向はすべて座標北を示す。
2. 調査区におけるグリッドは上記座標に基づき4m×4m方眼で設定している。グリッドの呼称は任意でX座標をアルファベット、Y座標をアラビア数字とし、呼称する場合はX-Yの順で表している。
3. 測量、実測図の縮尺は原則として下記のとおりである。

遺構	1/60		
炉跡・カマド	1/30		
遺物・土器	1/4	その他	2/3・1/1
4. 土層断面図およびエレベーション図における水平数値は海拔高度を示し、単位はmである。
5. 遺構名は以下の略号で表記した部分がある。

SI…竪穴住居跡	SK…土坑	SD…溝跡
SX…性格不明遺構		
6. 本書に用いた地形図は国土地理院発行の1/50,000・1/25,000、(旧)児玉町役場発行の1/2,500および(旧)児玉町都市計画図(1/2,500)を改図、転載した。また、各々の図に発行元・図幅名・発行年などを添えた。
7. 測量、実測図内の網部などの指示は以下のとおりである。

 …ローム地山	 …炉跡および焼土	 …重複遺構
--	--	---

遺構図版中の記号は以下の遺物を示す。
8. ●…土器 ○…石器・礫
9. 観察表中の()は推定値、[]は残存値、—は計測不可能を表している。

目 次

序
例言
凡例
目次

挿図目次
挿表目次
写真図版目次

I	調査に至る経過	1
II	遺跡の環境	3
1	地理的環境	3
2	歴史的環境	3
III	田端南堂遺跡の概要	9
1	遺跡の概要	9
2	基本土層	9
IV	検出された遺構と遺物	12
1	竪穴住居跡	12
2	溝状遺構	30
3	土坑	46
V	まとめ	50

参考文献
写真図版
報告書抄録

挿 図 目 次

図 1	旧児玉町と遺跡の位置	2	図 25	SD-01a 断面・エレベーション図	32
図 2	遺跡周辺の地形	4	図 26	SD-01b 断面図	33
図 3	周辺の主要遺跡	5	図 27	SD-01c 断面図	33
図 4	旧地形と遺跡の位置	7	図 28	SD-02 平面・断面図	34
図 5	周辺の遺跡出土の参考資料	8	図 29	SD-03 平面・断面図	35
図 6	基本土層図	10	図 30	SD-04 平面図	36
図 7	田端南堂遺跡全測図	11	図 31	SD-04 断面図	37
図 8	S1-01 平面・断面図	13	図 32	SD-05 平面図	37
図 9	S1-01 炉・貯蔵穴 平面・断面図	14	図 33	SD-05 断面図	38
図 10	S1-01 炭化材出土状況 ・エレベーション図	16	図 34	SD-06 平面図	39
図 11	S1-01 出土遺物状況図	17	図 35	SD-06 断面図	40
図 12	S1-01 出土遺物 (1)	17	図 36	SD-07 平面図 (1)	40
図 13	S1-01 出土遺物 (2)	18	図 37	SD-07 平面図 (2)	41
図 14	S1-01 出土遺物 (3)	20	図 38	SD-07 断面・エレベーション図	41
図 15	S1-01 出土遺物 (4)	21	図 39	SD-08 平面・断面図	42
図 16	S1-01 出土遺物 (5)	22	図 40	SD-09 平面・断面図	43
図 17	S1-02 平面・断面図	24	図 41	SD-10 平面・断面図	44
図 18	S1-02 炉跡平面 ・エレベーション図	25	図 42	SD-11 平面・断面図	45
図 19	S1-02 貯蔵穴平面・断面図	26	図 43	SD-12 平面・断面図	46
図 20	S1-02 炭化材出土状況図	27	図 44	SK-01 平面・断面図	46
図 21	S1-02 遺物出土状況図	28	図 45	SK-02 平面・断面図	47
図 22	S1-02 出土遺物	29	図 46	SK-03 平面・断面図	47
図 23	SD-01 a・b・c 平面図 (1)	31	図 47	SK-03 出土遺物	48
図 24	SD-01 a・b・c 平面図 (2)	32	図 48	SK-04 平面・エレベーション図	48
			図 49	SK-05 平面・断面図	49

挿 表 目 次

表 1	S1-01 出土遺物観察表 (1)	18	表 5	S1-01 出土遺物観察表 (5)	21
表 2	S1-01 出土遺物観察表 (2)	19	表 6	S1-01 出土遺物観察表 (6)	22
表 3	S1-01 出土遺物観察表 (3)	20	表 7	S1-02 出土遺物観察表	30
表 4	S1-01 出土遺物観察表 (4)	20	表 8	SK-02 出土遺物観察表	48

写真図版目次

写真図版 1	遺跡遠景 (1)	写真図版 9	SD-02
	遺跡遠景 (2)		SD-04 (1)
	遺跡全景		SD-04 (2)
写真図版 2	1区全景	写真図版 10	SD-06 (1)
	2区全景		SD-06 (2)
	2区全景		SD-06 (3)
写真図版 3	1・3区全景	写真図版 11	SD-07
	2・3区全景		SD-10・11
	SI-01		SD-10・11・12
写真図版 4	SI-01	写真図版 12	SK-01
	SI-01 遺物出土状況		SK-03
	SI-01 遺物出土状況 (拡大)		SK-05 (1)
写真図版 5	SI-01 遺物出土状況	写真図版 13	SK-05 (2)
	SI-01 炭化材出土状況		畑作跡
	SI-01 P4		表土除去作業
写真図版 6	SI-02	写真図版 14	作業風景 (SI-01)
	SI-02 炉跡		作業風景 (SI-02)
	SI-02 遺物出土状況		作業風景 (SI-02)
写真図版 7	SI-02 貯蔵穴	写真図版 15	SI-01 出土遺物 (1)
	SI-02 炭化材	写真図版 16	SI-01 出土遺物 (2)
	SI-02 P3 土層断面	写真図版 17	SI-01 出土遺物 (3)
写真図版 8	SD-01 (1)		SI-02 出土遺物
	SD-01 (2)		
	SD-01 (3)		

I 調査に至る経過

平成5年6月28日付けで、平成6年1月6日、児玉郡酪農業協働組合理事鈴木邦夫より「集送乳・牛乳処理施設建設予定地内における埋蔵文化財の所在及び取り扱いについて」という照会文書が児玉町教育委員会教育長宛に提出された。この区域は『埼玉県遺跡地図』児玉町No.120遺跡に該当しており、埋蔵文化財が存在する可能性が高い旨を照会者に回答した。後日、照会者より町教育委員会に試掘調査依頼書が提出され、平成5年7月12日に試掘調査を実施した。

試掘調査は施設建設予定地に任意にトレンチを設定し、バックホーを用いて遺構確認面まで掘削を行った。確認面からは土器片や竪穴住居跡と思われる暗灰褐色土の落ち込みが確認され、遺跡の所在が明らかとなった。町教育委員会では試掘調査の成果をふまえて、7月20日付け、児教社第110号において文書による回答を行い、8月4日に保存の措置について協議をおこなった。平成6年1月6日、児玉郡酪農業協働組三役と協議・調整をおこない、同月17日、組合長、設計者と工事計画の変更等について協議・調整を重ねた。これらの調整で工事計画を変更する事は困難な状況であるとの結論に達し、やむをえず発掘調査を実施して記録保存の措置を講ずる事となった。また、関連する道路改良部分に関しては建設工事の工程等の関係から別途協議する事となった。

平成6年1月20日、児玉郡酪農業協働組合理事鈴木邦夫と児玉町遺跡調査会長富丘文雄により、集送乳・牛乳処理施設建設予定地部分の埋蔵文化財保存事業託契約を締結した。同日付け児玉郡酪農業協働組合理事長より「埋蔵文化財発掘調査の届け出」が児玉町教育委員会に提出され、児教社第290号として埼玉県教育委員会教育長を経て文化庁長官に提出された。

埼玉県教育委員会教育長より平成6年2月16日付けで教文第3-581「周知の埋蔵文化財包蔵地における土木工事について」が児玉郡酪農業協働組合理事鈴木邦夫宛に、同日付け教文第2-194号「埋蔵文化財の発掘調査について」の通知が児玉町遺跡調査会長宛に通知された。これにともない集送乳・牛乳処理施設建設予定地部分（第1・2区）の発掘調査が行われた。

平成7年4月28日付け、児遺調第1号により集送乳・牛乳処理施設建設予定地部分の発掘調査の終了が児玉郡酪農業協働組合理事鈴木邦夫に報告された。

9月22日、児玉郡酪農業協働組と児玉町遺跡調査会により牛乳集出荷処理施設関連の道路改良に伴う埋蔵文化財の取り扱いについて協議が行われた。

この協議にもとづいて同日、道路改良区域（第3区）における埋蔵文化財発掘調査等に関する協定が取り交わされ、同区域の発掘調査に至った。（本庄市教育委員会文化財保護課）



図1 旧児玉町と遺跡の位置

II 遺跡の環境

1 地理的環境

田端南堂遺跡の所在する児玉地域は、平成 18 年 1 月 10 日の合併により、旧「児玉町」から新「本庄市」となり、関東平野の北西縁辺部に位置し、平野部から関東山地へと移行する中途の地域に相当する。

山地部は秩父山地より連なり、上武山地と呼称される。上武山地は群馬県西南部の赤久縄山を中心とする地域と、埼玉県北西部の標高 1037.7 m の城峯山を主峰とする地域の総称であり、南東から北西方向へと展開している。この上武山地を分かち形で南西から北東方向へと流れる神流川は、埼玉・群馬・長野・山梨・東京都との都県境をなす三国山地に源を発している。その流末は烏川に合流し、さらに流下して、北西から南東方向へと流れて利根川へ達している。児玉地域は、これらの山地、および河川によって囲まれた空間である。

丘陵部は上武山地裾部より南西から北東方向へと半島状にのび、児玉丘陵と呼称される。この児玉丘陵の延長には第 3 紀に形成された生野山丘陵・大久保山丘陵が列状に並んでいる。台地面は本庄台地と呼称されるものであり、先述の神流川の堆積作用によって形成された洪積扇状地である。

本庄台地と生野山・大久保山残丘の間に位置する地域は、女堀川によって開析された沖積低地となっており、南西から北東方向へと展開している。この沖積低地には、開析作用にともなって形成された自然堤防、また開析をうけずに台地面の遺存する微高地が点在している。圃場整備以前の地形は、もはやこれら微高地と低地部分の比高差が視覚的に区別されるものではなかったが、前者が居住地および畑作地、後者が水田として使用されていた。このことは地形に適応し、生活を送ってきた先人達の営為が土地利用の差として今日まで受け継がれてきたことを物語っている。

児玉地域は、上述の上武山地から丘陵部を経て本庄台地に至り、南西から北東方向に細長い形を呈し、変化に富む地形から構成されているといえよう。

田端南堂遺跡は、低地帯の上流部に相当している。この上流域では、丘陵部と台地面との境界域が侵食されて発達した沖積低地が、樹枝状に入り組む景観を呈している。本遺跡はその中のひとつに位置する、標高 99 ～ 100 m を測る微高地上に占地している。またこの沖積低地は、遺跡付近で幅約 450 m を測り、南側は金星地区の丘陵に、北側は田端地区の台地面に接している。

本遺跡が生活の場として利用された五領期（古墳時代前期）には、これらの低地のいずれかが生産基盤の一つである水田として利用されたのであろう。（大熊季広）

2 歴史的環境

田端南堂遺跡（図 3-1）の周辺について、古墳時代前期の遺跡を中心としつつ、それ以降の代表的な遺跡の推移を以下に概観する。なお、図 4 では、ミカド、ミカド西、十二天の各遺跡にて出土した資料の実測図を掲載した。これらは、昭和 56 年に刊行された『金星遺跡群』（児玉町文化財調査報告書第 2 集）に関わる資料である。

〔古墳時代〕 本遺跡の南西約 600 m、赤根川上流部に相当する沖積低地域内の微高地には、ミカド

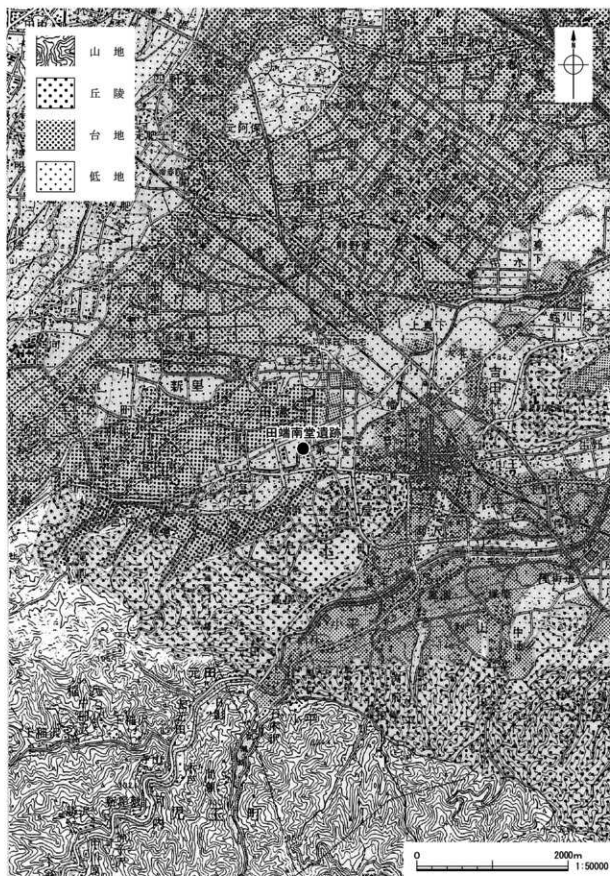


図2 遺跡周辺の地形

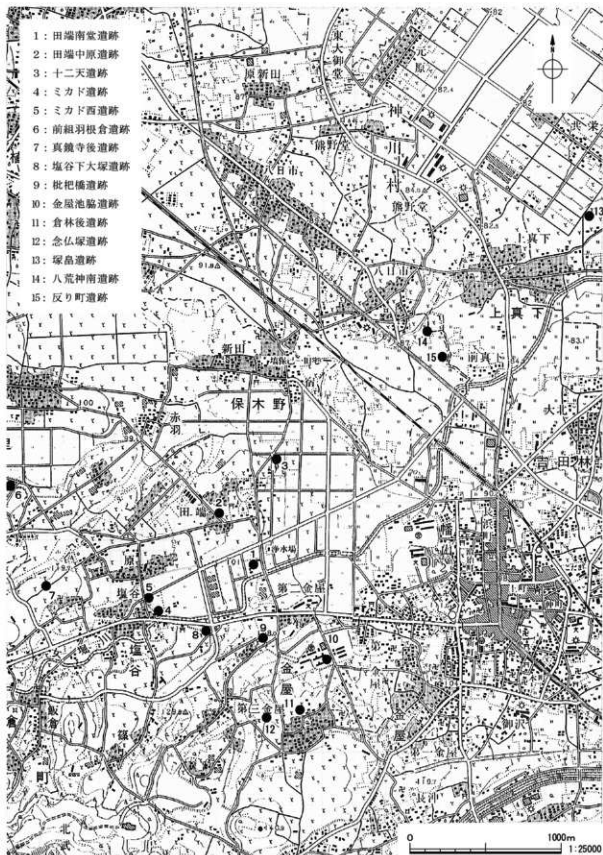


図3 周辺の主要遺跡

遺跡(図3-4、以下図3内の位置は枝番号のみ表示)およびミカド西遺跡(5)が所在する。田端南堂を含めたこれらの遺跡は、集落が後述する伝統的な占地にとどまらず、分布域を次第に拡大した消息を示す例といえる。ミカド遺跡は、田端南堂遺跡の南西約500mに位置する。河川改修以前の地形としては、蛇行しながら南西から北東方向へと流下する旧赤根川右岸の南側緩斜面、沖積低地に張り出す丘陵端部と対峙する位置にある。既往の調査により、五領期の堅穴住居跡1軒が検出されている。なお、先述した向かいの丘陵端部には塩谷下大塚遺跡(8)が所在し、弥生時代後期から古墳時代前期にかけて営まれた方形周溝墓群、および古墳時代前期の堅穴住居跡が確認されている。

ミカド西遺跡は田端南堂遺跡の南西約600mに位置し、微高地の北側緩斜面に占地している。同遺跡における古墳時代前期の遺構は、堅穴住居跡3軒である。これらの先後関係は明らかでないが、互いに重複もしくは近接することから、2時期以上にわたって構築された可能性が指摘できる。また、主軸方位がほぼ共通しており、建築に際し一定の規制下に置かれ続けていたことがうかがえる。

十二天遺跡(3)は、田端南堂遺跡の北東約650m、田端地区の台地面の先端に位置し、遺跡の東側はひらけた沖積低地となっている。同遺跡における古墳時代前期の遺構として土坑1基が挙げられ、その覆土上層からは、複合口縁の壺形土器上半部(図5-10)が検出されている。

総じて古墳時代前期では、集落遺跡が増加傾向を示す。上記の例に対し、丘陵部では前組羽根倉遺跡(6)などが分布し、これらを望む低位の山地域にも遺跡が複数確認されている。これらは、弥生時代後期からの田に面する集落占地を踏襲したものであり、しばしば弥生土器由来の伝統的な装飾をもつ土器を伴う。また、低地域でも大規模集落の占地が認められるが、これらは、女堀川中流域の灌漑・排水施設が充実したことをうけての水田開発に伴い、新規に営まれた集落であろう。

古墳時代中・後期においては、本遺跡の周辺にも真鏡寺後遺跡(7)や塩谷下大塚遺跡、あるいはミカド遺跡などが形成され、遺跡数がさらに増加する。

〔奈良・平安時代〕 集落遺跡として、丘陵部では真鏡寺後遺跡、また低位台地面の立地例に、田端地内では十二天遺跡などが挙げられる。

田端地区の東側では、かつて金屋糸里遺跡が展開していた。十二天遺跡の南端では、「田端大溝」と呼ばれる古代の灌漑用排水施設が検出されており、これが低位の台地端に沿って南西方面にのびていることが確認されている。この用水は、当時の灌漑用排水系統に組み込まれ、水田を灌漑しながら等高線に沿うように流れており、赤根川や金鑽川も流路を大きく変更されているものと考えられる。

〔中世以降〕 平安時代末～鎌倉時代の遺跡として、真鏡寺後遺跡(真鏡寺館跡)が挙げられる。検出された中世前半期の方形館は、児玉党塩谷氏の居館と推測される。また、ミカド遺跡では、堀を伴う建物跡などが確認されている。

田端中原遺跡(2)の南側に接して、「上杉道」と呼ばれる古道が通っている。これは、「鎌倉街道上道」から児玉で分岐する「鎌倉街道」の枝道で、塩谷の丘陵部および神流川を越え、関東管領上杉氏の居城であった群馬県藤岡市の平井城方面へと続く中世幹道のひとつである。

本遺跡周辺は、近世において「田端村」と呼称されていた。この村の由緒については、元和年中(17世紀第1四半期)開墾という、『新編武蔵風土記稿』の記述が知られている。開村当初、「田端村」は北側の低位台地面にあったと考えられ、今日の位置は、洪水の頻発から村の中心をのちに移した結果とみなすべきであろう。

(和久拓照)

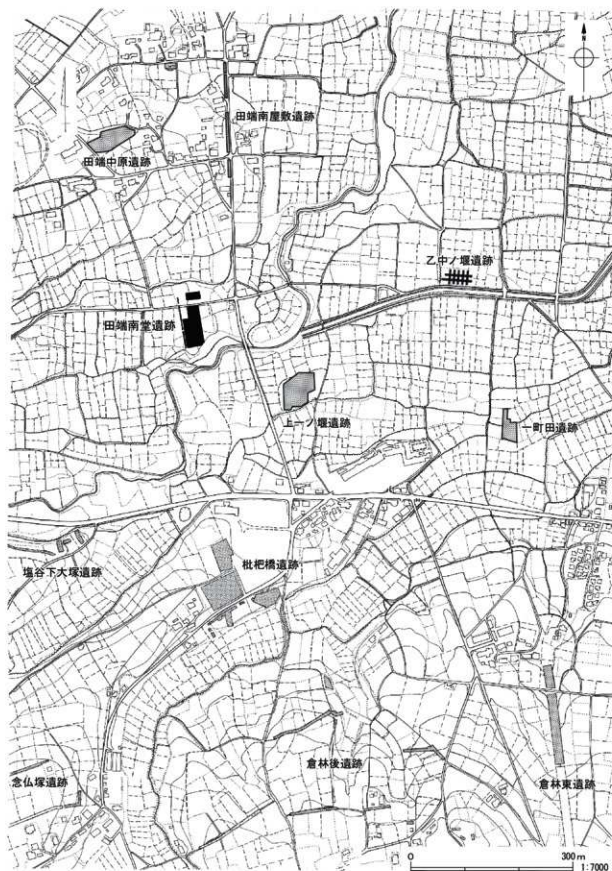


図4 旧地形と遺跡の位置

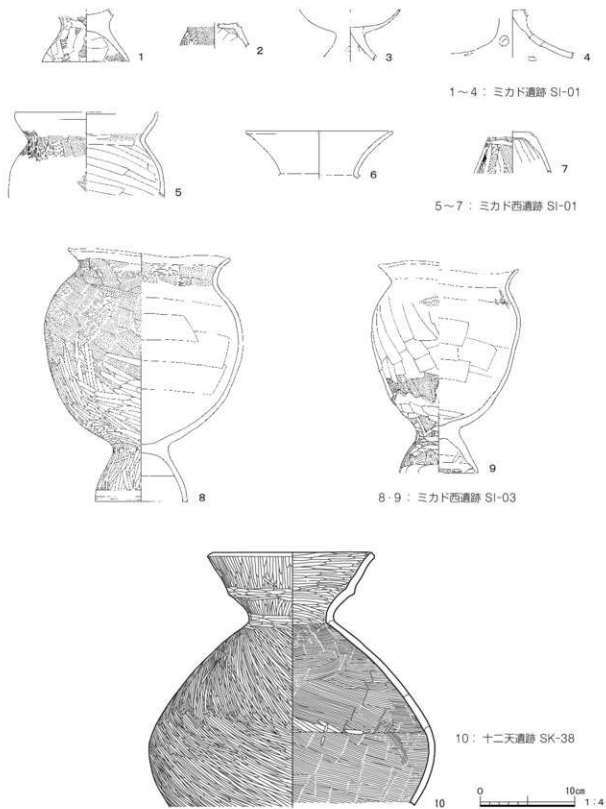


図5 周辺の遺跡出土の参考資料

Ⅲ 田端南堂遺跡の概要

1 遺跡の概要

本遺跡は埼玉県児玉郡児玉町大字田端字南堂に所在し、『埼玉県遺跡地図』のNo.54-120の金屋条里遺跡に該当している。発掘調査の結果、古代に遡る条里水田跡は検出されず、沖積低地内の島状の微高地に占地する古墳時代前期の集落遺跡であることが判明した。古代条里である金屋条里遺跡とは年代や遺跡の性格が異なり、同一遺跡名では齟齬をきたすため、金屋条里遺跡との分離を図り増補変更を行うため新たに遺跡名を付すこととなった。

本遺跡の調査時期は、児玉町遺跡調査会並びに児玉町教育委員会による発掘件数が年々増加していた時期にあっていた。従来の遺跡の命名法は小字名を遺跡名としていたが、同一の小字名が大字を異にして複数存在し、将来的に混乱が生じる可能性が予想された。同教育委員会文化財係並びに遺跡調査会において協議した結果、今後の遺跡名は大字名と小字名を複合させることとなった。

以上の経緯により、本遺跡を田端南堂遺跡(No.54-325)と呼称する。また遺跡の調査区は集送乳・牛乳処理施設建設部分の北側を1区、南側を2区、道路改良工事にかかる部分を3区と呼称する。なお調査中第1区西側の2号住居跡としたものは遺構でないことが判明したため、本報告では現地調査時および遺物注記の表示における3区3号住居跡をSI-02とする。

本遺跡は、上武山地に源を発する赤根川により開析された沖積低地中に位置している。この地域は、先述の古代条里施工区域である金屋条里遺跡として従来とらえられていたものである。この沖積低地の中には狭隘な微高地が少数点在し、その中のひとつに遺跡は占地している。

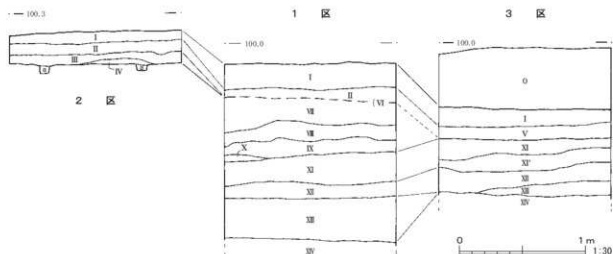
検出された遺構・遺物は、古墳時代前期の堅穴住居跡2軒(SI-01、02)と土坑2基(SK-02・03)、古代に遡る可能性のある溝状遺構4条(SD-04~07)、近代前半以前の溝状遺構5条(SD-01c、09~12)と土坑1基(SK-05)、近世後半~近代の溝状遺構5条(SD-01a・01b・02・03、08)と土坑1基(SK-01)、および時期不明の土坑1基(SK-04)である。

住居跡はともに火災住居であった。このため住居の構築材であった炭化材を得ることができた。また主柱下端部は地理的条件から腐朽を免れ、その一部が遺存していた。SI-01からは、住居廃絶時に遺棄された状態での土器群が検出され、良好な一括資料が得られている。また同住居跡からは駒石が住居に流れ込む状況で検出され、これらの編み物石の日常的な使用法ないし収納法を示唆するものといえよう。

2 基本土層

図6は、1区から3区の基本土層図である。基本土層の観察位置は、遺跡全測図(図7)中に▼▼で示した。また標高差の関係から、高位から低位となるように、2区・1区・3区の順におおむね南から北方向へと図示した。3区0層は、昭和52~55年に実施された児玉町第2次農業構造改善事業(圃場整備)に伴う地業層である。この層を除くと旧地形が再現でき、南から北へと傾斜していることがわかる。

1区Ⅰ・Ⅱ層と2区Ⅱ層は1783(天明3)年噴出の浅間山系テフラ(As-A)を含み、近世後半から現代のものとみられる。Ⅲ層とa層は、2区で確認された。Ⅲ層は層下位に鉄分が凝集し、該区が近世前半期以前に水田として利用されていたことを示唆している。a層は、畑作に伴う鋤痕と思わ



田嶋南堂遺跡基本土層説明

- 0 暗褐色土 児玉町第2次農業構造改善事業による客土。現耕作土。
- I 明灰褐色土 浅間山系テフラ (As-A₁ ~1mm)・小礫 (~10 mm) を中量含む。しまりは軟らかく、ぼそぼそしている。粘性なし。現耕作土。
- II 明灰褐色土 I に準ずるが暗茶褐色・暗褐色土粒子 (~2mm) を中量含む。しまりはIに比べてやや軟らかく、粘性はない。田表土。
- III 暗茶褐色土 大山炭粒を少量均一に小礫 (1~2mm) を少量含む。鉄分凝集粒を多量に含む。しまりは普通で粘性あり。水田の床と思われる。
- IV 暗褐色土
- V 暗褐色砂利 砂利主体の層。鉄分を含む。
- VI 暗茶褐色土 暗褐色粒子 (~2mm)・暗茶褐色土粒子 (~3mm) を含む。暗茶褐色土塊を中量、白色粒子 (~1mm) を少量含む。2~5mmの小礫を含む。埴土粒子 (~3mm) を微量含む。しまりはIIIに比べてやや軟らかく、粘性弱い。
- VII 灰褐色土 小礫 (2~5mm) を多量、暗茶褐色・暗褐色土粒子 (~2mm)・白色粒子 (~1mm) を含む。しまり軟らかく、

- 粘性なし。古墳時代前期遺構確認面。
- VIII 灰褐色土 小礫 (2~5mm)・暗褐色土粒子 (~2mm)・白色粒子 (~1mm) を中量含む。しまりは普通で粘性は非常に弱い。
- IX 暗灰褐色土 VIIに比べてやや暗い。暗褐色粒子 (~2mm)・暗茶褐色土粒子 (~3mm) を含み、暗茶褐色土塊を中量、白色粒子 (~1mm) を少量含む。しまりは普通、粘性は弱い。
- X 暗青灰色土 暗茶褐色土粒子 (~2mm) を多量に含み、暗褐色土粒子 (~2mm) を少量含む。しまりは硬く、粘性は強い。
- XI 明褐色粘質土 鉄分凝集粒 (~2mm)・小礫 (~1.5mm) を少量含む。しまりは硬く、粘性強い。
- XII 暗褐色粘質土 鉄分凝集粒 (~5mm) を中量含む。しまりは硬く、粘性強い。
- XIII 褐色粘質土 鉄分凝集粒小塊 (10~20mm) を少量含む。しまりは硬く、粘性は強い。
- XIV 砂礫層
- a 茶褐色土 畑作痕。

図6 基本土層図

れる小溝群の覆土であり、該区が水田耕作地以前には畑作地として利用されていたことを物語る。

V層は3区で確認されたもので、小礫を主体とする。この層の形成には、旧赤根川の氾濫と、人為的要因が考えられる。河川旧流路の氾濫によるものでないならば、当該区が旧地形において耕作地の境界付近に当たることから、馬入れの修繕や地業といった人為の影響も考えられよう。

VI層は図6に示されていないが、SI-01より西の箇所にて認められる層である。この層は、夾雑物が均質に混在し、また特定の耕作痕が見られないことから、比較的長期間にわたり耕作地として利用された結果と推定される。出土遺物がなく時期の比定は困難であるが、おおむね近世前半期以前の層としてとらえられる。

VII層は、古墳時代前期の遺構確認面にあたる層である。台地面における漸移層、あるいはローム層上層(武蔵野面に相当)に対比される層である。このVII層以下が、当該地における基盤層である。現地表面からの深さは、1区で約40cmを測る。この基盤層下約80cmまでは、灰色を基調とする層(VII・IX・X層)であり、XI~XIII層は褐色を基調とする粘質土である。XI層上面およびXIII層下面是現地表面からそれぞれ約90cm、165cmを測る。また、XI~XIII層中には恒常的な滞水によるとみられる鉄分凝集粒が多く、この滞水がSI-01-02の主柱下端部を遺存せしめた要因となっている。

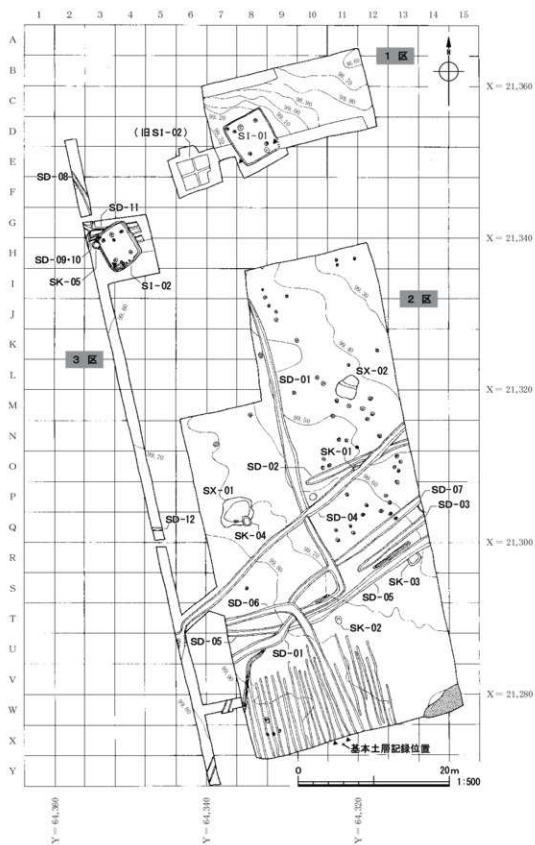


圖7 田端南堂遺跡全測圖

IV 発見された遺構と遺物

1 竪穴住居跡

SI-01 (図8~16、表1~6 / 写真図版3~5)

本住居跡は、1区の南壁西側、D-8グリッド周辺において検出された。調査当初、住居跡南壁は調査区外にのびていた。この状態で、現地表面から確認面、および住居跡覆土までの累積した土層観察が行えるため、調査区南壁のセクション図を作成した。のちに同壁を拡張し、遺構の全容を確認した。また、支柱穴を掘り下げたところ、支柱のうち下端部が遺存しているものがあることが判明し、完掘写真撮影の終了後、基本土層の観察とあわせてSPD-D'ラインを設定し、断ち割りを試みた。

覆土上層の第1層は、南西から北東方向へと堆積しており、SPB-B'ラインの北側およびSPC-C'ラインの東側にはその堆積が及んでおらず、南西側に偏在している。住居跡南西側は地形上の高位にあたり、土壌の移動に伴う自然堆積層である。

本住居跡は、火災住居である。覆土の2、5・6、8層は焼土および炭化物の粒子を多量に含み、とりわけ2・8層中では炭化材の遺存が認められた。2'~4'、7層では、焼土と炭化物の粒子は微量観察されたのみである。これらの焼土・炭化物粒子を微量しか含まない土層は、住居廃絶後の自然堆積はなく、住居壁体および外部構造物からの流入が考えられる。SPB-B'ラインの8・9層の堆積状況に注目すると、9層が安定角度を欠くことから、きわめて短期間のうちに堆積が完了したことが推測される。

「発火地点が最も火の手が強く（その火の手が強い方向に向かって他の材質が倒れてゆくものである…）」との笹森健一氏の指摘（笹森、1976）がある。消火を前提としない火災の進行を考えると、発火地点付近の部材は、発火から焼尽に至るまで、燃焼状態を継続することが推定される。この発火地点の炎が、他の部材に類焼し火災が広がってゆくと、類焼を受ける他の部材は、発火地点側から燃焼してゆくことはいままでのない。この類焼を受ける他の部材の物理的強度は、発火地点側が先行して低下することは容易に想像できよう。

このような火災進行の性質や、炭化材の遺存状況および覆土などから本跡の火災はどのように復元されるであろうか。火災の進行は住居跡南側から北側へと燃え移っていったものと思われる。住居跡南側は家屋・屋蓋構造物が焼尽したために炭化材が遺存しなかったのであろう。また北側は、家屋・屋蓋構造物が焼尽に至る前に、いわば焼灼した状態で南側の家屋・屋蓋構造物の崩壊とともに南側へ倒壊したことが推定される。先に注目した第8層・第9層の堆積状況も住居倒壊にともなう垂木上位の崩落からなる椀子の原理による壁体ないし住居外部構造物への圧迫による崩壊流入・堆積したものであろう。

確認面における規模は、南北約6m30cm、東西約5m66cm、深さは約34~46cmを測り、壁はやや角度をもって直線的に立ち上がる。東壁側が深い傾向が認められる。上面プランは南北軸がやや長い方形を呈する。主軸方位はN-32°-Wを示す。他の遺構との重複関係はなく、遺存状態は良好である。

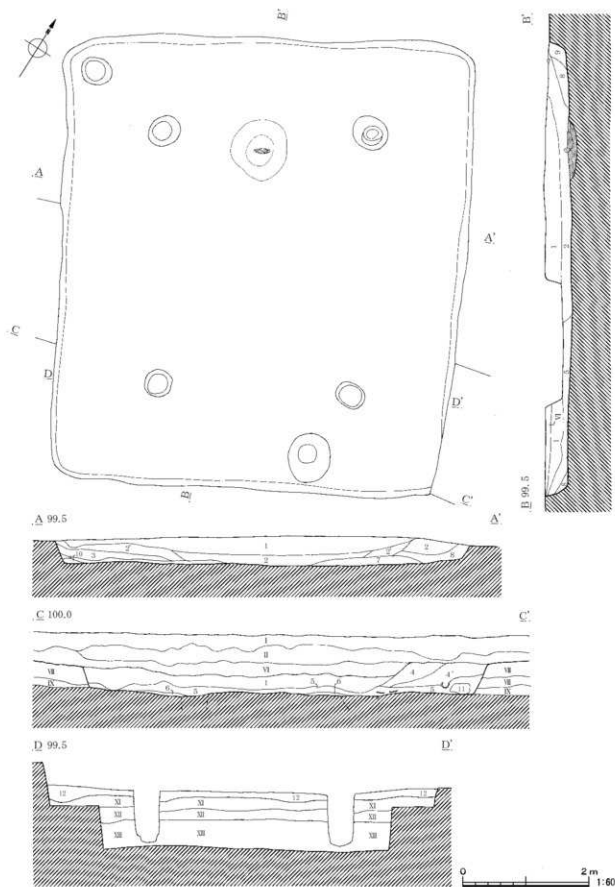


圖8 S1-01 平面·断面圖

S1-01 土層説明

- | | |
|--|---|
| <p>1 暗灰茶褐色土 暗褐色粒子(〜2mm)・白色粒子(〜1mm)を含み、焼土粒子(〜3mm)・軽石(〜1mm)・小礫(2〜8mm)を少量含む。しまりは軟らかく、粘性あり。</p> <p>2 暗灰褐色土 焼土粒(〜3mm)・炭化物粒子(〜1mm)を多量に含み、小礫・軽石(1に準ずる)・炭化材を中量含む。しまりはやや硬く、粘性はやや強い。</p> <p>3 明褐色土 2よりやや明るく、炭化物粒子・暗茶褐色粒子・焼土粒子を微量含む。しまりはやや硬く、粘性はやや強い。</p> <p>4 暗灰褐色土 暗褐色土を主体とし小礫(2〜8mm)を中量含み軽石(〜0.5mm)を少量含む。焼土粒子及び炭化物粒子はほとんど含まれない。しまりは硬く、粘性は強い。</p> <p>5 暗灰茶褐色土 4に類似するが、焼土粒子(〜5mm)及び炭化物粒子(〜1mm)を少量含む。色調はやや暗い。暗褐色粒子(〜2</p> | <p>mm)・白色粒子(〜2mm)を中量、焼土粒子・炭化物粒子(1〜3mm)を多量に含む。しまりは1に比べて硬く、粘性あり。</p> <p>6 明褐色土 5に類似するが焼土粒・炭化物粒子を更に多く含む。</p> <p>7 暗黒褐色土 軽石を少量、細かい礫及び焼土粒子を微量含む。しまりは1・2・2'に比べてやや硬く、粘性はやや強い。</p> <p>8 暗灰褐色土 焼土ブロック・焼土塊(3〜30mm)・焼土粒子(〜1mm)及び炭化材(10mm)・炭化物粒子(〜2mm)を集中的に含む。しまりはやや硬く、粘性はやや強い。</p> <p>9 灰茶褐色土 焼土粒子を均一に含む。しまりは硬く、粘性はやや強い。</p> <p>10 暗黒褐色土 ローム粒子(〜1mm)を含む。しまりは硬く粘性は2・2'よりやや強い。</p> <p>11 明褐色粘質土 明褐色粘質土。</p> <p>12 暗茶褐色土 焼土粒(約5mm)・炭化物粒を少量、片岩破片(約1cm)を微量含む。しまりは硬く、粘性あり。貼り床。</p> |
|--|---|

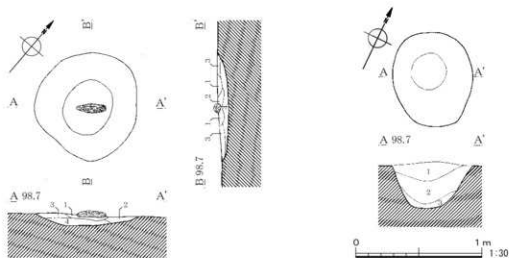


図9 S1-01 炉・貯蔵穴 平面・断面図

S1-01 炉 土層説明

- 1 暗赤褐色土 焼土ブロック・焼土粒を多量に、炭化物粒を均一に微量含む。しまりは普通で粘性は弱い。
- 2 明黒褐色土 炭化物粒を多量に、焼土粒を均一に含む。しまりは軟らかく、粘性は弱い。
- 3 暗褐色土 焼土粒・炭化物粒を少量含む、灰分を多量に含む。しまりは軟らかく、粘性はない。
- 4 明茶褐色土 焼土粒を均一に、炭化物粒を微量含む。しまりは普通で粘性あり。

S1-01 貯蔵穴 土層説明

- 1 暗茶褐色土 焼土粒(約5mm)・炭化物粒を少量、片岩破片(約1cm)を微量含む。しまりは硬く、粘性あり。
- 2 暗茶褐色土 焼土粒(約5mm)を多量に、炭化物粒・片岩粒(約2〜4mm)を少量含む。しまりは硬く、粘性あり。
- 3 明黒褐色土 炭化物・炭化物粒を多量に、焼土粒を微量含む。しまりは普通で粘性あり。

床には、貼り床が施されている。厚さは最深で約18cm、平均約10cmを測る。床面の状態はわずかな起伏を有するものの平坦であり、比較的良好に踏み固められている。壁溝および梯子ビットは検出されなかった。

主柱は4本であり、各壁下端から1m〜1m20cmの位置、住居跡の対角線上に整然と配されている。平面プランは円形を指向しており、掘り方の直径は床面において40〜50cm、深さは80cm前後を測る。断面形は、底部が一段落ち込むものと平坦なものがあるが、壁はいずれも直線のかつほぼ垂直に

立ち上がる。北東コーナー寄りの主柱穴からは、断面が楔状に加工された板状の主柱下端部が長軸を東西にもち、北寄りの位置で検出された。この主柱下端部は上部長辺約14 cm、短辺約4 cm、長さ約16 cmを測る。木取りは、年輪が長辺にほぼ平行となる板目である。

地床炉は、住居跡北側、主中穴間中央やや南よりに検出された。調査時において、炉跡中央にはほぼ東西軸をもつ礫を炉石と確認し、これに合わせ土層観察を行った。このため住居主軸と軸を異にするものとなったが、整理段階の観察で、同礫には長期にわたる被熱を示す顕著な痕跡がないことが判明し、炉石ではないとの結論に至った。この礫は、住居の火災・倒壊にともない落下した編み物石の一つであり、偶発的に炉跡上に遺存していたものであろう。炉の規模は住居主軸で約86 cm、短径約82 cm、深さ約7 cmを測る。平面プランは不整形を呈し、断面形は浅い皿状をなす。覆土上層は被熱が著しく、焼土ブロックが発達していた。

貯蔵穴は、住居跡南壁際東寄りにて検出された。規模は長径約68 cm、短径約59 cm、深さ約30 cmを測る。平面プランは楕円形を呈する。底部は緩やかな弧を描き、壁はやや角度をもって弧状、かつ緩やかに立ち上がる。貯蔵穴からは、遺物は検出されなかった。

本跡の遺物の出土状況については、完成品ないしそれに準ずる土器が住居跡南東コーナーに集中し、住居跡中央から北半の区域では破片遺物が散在している状況であった。土器の集中箇所は、屋蓋と壁の構造体が住居跡の火災によって倒壊し、床面に据え置かれたものが圧壊した状態で検出された。

土器の分布・配置には器種ごとの傾向がうかがわれ、北側に主に供献形態の小型器種、南側に煮沸形態および貯蔵形態の大型器種がそれぞれまとまり、大きく2つの群としてとらえることができる。北側の小型器種の群は小型鉢形土器と小型器台形土器から構成され、単孔の小型甔形土器を取り囲むように分布している。これらの小型器種は、小型甔形土器を東壁に配置し、この前面北側に小型鉢形土器、南側には小型器台形が置かれ、小型甔形土器を境にしておおむね同一器種がまとまりをもって配置されるような様相を呈する。

南側の群にはS字状口縁台付甔形土器が3個体と、刷毛目調整甔形土器が出土している。このうちの2個体分のS字状口縁台付甔形土器は、住居東壁と平行の位置にて圧壊していた。もう1個体のS字状口縁台付甔形土器および刷毛目調整甔形土器は、西側に倒れて破砕した状態であり、もともとは前記の2個体に連なっていたことが予想される。

やや離れて南側の南東コーナーから地床炉付近にかけて検出された小型鉢形土器は、その出土レベルから、前記2群の土器群の設置行為には伴わないものと思われる。住居跡北西の北壁際の床面からは、指頭圧痕の残る複合口縁を呈する甔形土器が検出されている。この土器は、形態の特徴から弥生時代後期の吉ヶ谷式土器にその系譜を求めることができよう。その他の遺物として、東海西部に系譜を求められる元屋敷系の高坏型土器、土製紡錘車が検出されている。これらの遺物は厳密な出土位置・レベルが記録されていないものの、住居跡総体での遺物検出状況から、おおむね一括性が保証されよう。

北壁から地床炉にかけては棒状の円礫が集中して検出された。棒状礫は北壁側から南にかけての三角堆積(8・9層)に沿うような形で、北側では最高位30 cmを測り、地床炉付近では床面に接して検出された。

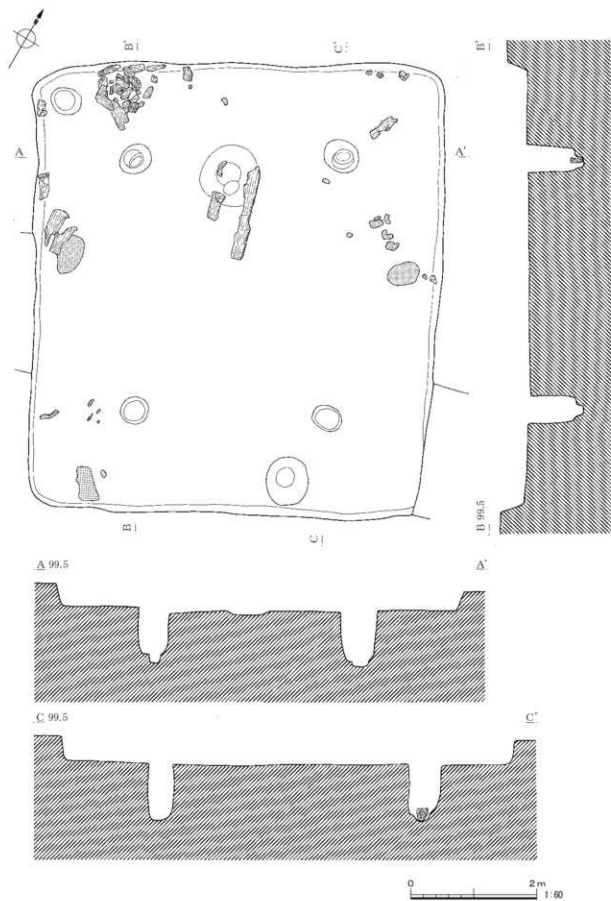


図 10 S1-01 炭化材出土状況・エレベーション図

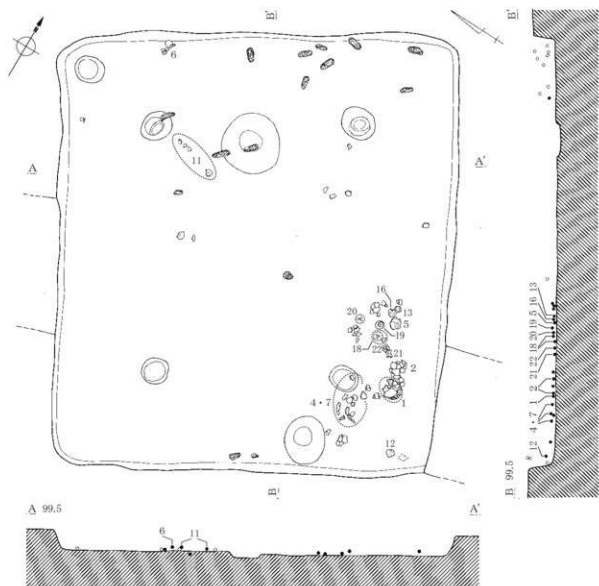


图 11 S1-01 遺物出土状況図

0 2m 1:60

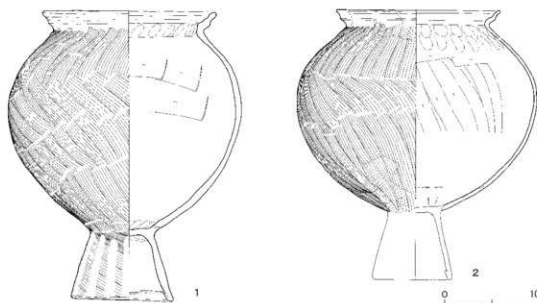


图 12 S1-01 出土遺物 (I)

0 10cm 1:4

表1 S1-01 出土遺物観察表 (1)

No.	器種	法量 (cm)	形態・成形手法の特徴	調整手法の特徴	胎土・色調	備考
1	土師器 甕	口径 11.3 底径 9.4 器高 27.5	S字状口縁の台付甕。頸部から外反して一次口縁、さらに粘土を継ぎ足し外反させて二次口縁をつくる。胴部中位に最大径をもつ。	外面 - 口縁部ヨコナデ。胴部ナナメハケ。台部ナナメハケヨコナデ。内面 - 口縁部ヨコナデ。頸部に指頭圧痕。胴部上位ヨコナデ。	砂礫 内 - 淡黄色 外 - にぶい黄橙色	ほぼ完形。
2	土師器 甕	口径 (15.6) 底径 - 器高 (18.8)	S字状口縁の台付甕。頸部から外反して一次口縁、さらに粘土を継ぎ足し外反させて二次口縁をつくる。胴部中位に最大径をもつ。	外面 - 口縁部ヨコナデ。胴部上位タテハケ。胴部中位以下ナナメハケ。内面 - 口縁部ヨコナデ。頸部~胴部上位に指頭圧痕。胴部上位タテナデ。	砂礫、赤色粒 外 - 淡黄色 内 - 灰白色	台部欠損。

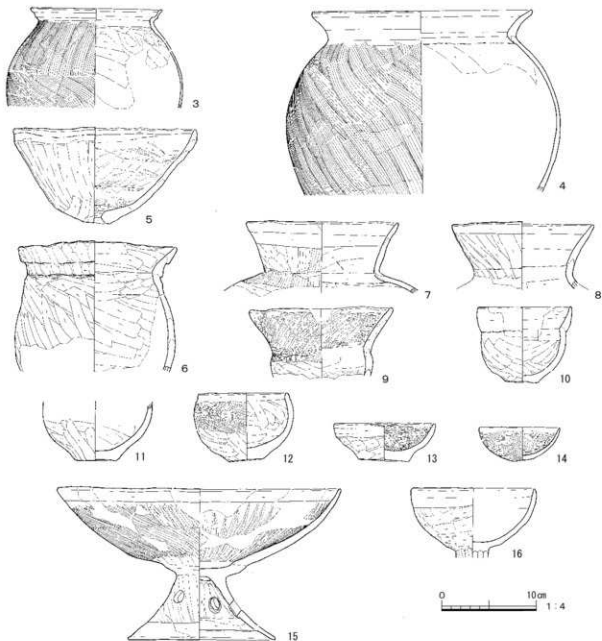


図13 S1-01 出土遺物 (2)

表2 S1-01 出土物観察表 (2)

No.	器種	法量 (cm)	形態・成形手法の特徴	調整手法の特徴	胎土・色調	備考
3	土師器 甕	口径 (12.5) 底径 — 器高 [9.0]	S字状口縁の台付甕。頸部から外反して一次口縁、さらに粘土を継ぎ足し外反させて二次口縁をつくる。胴部中に最大径をもつ。	外面 — 口縁部ヨコナデ。胴部上位タテハケ。胴部中位以下ナメハケ。内面 — 口縁部ヨコナデ。胴部上位に指頭圧痕。胴部上位ナデ。	砂礫、赤色粒 外 — にぶい黄褐色 内 — 灰黄褐色	胴部上位以上の1/4残存。
4	土師器 甕	口径 (20.8) 底径 — 器高 [18.1]	S字状口縁の台付甕。頸部から外反して一次口縁、さらに粘土を継ぎ足し外反させて二次口縁をつくる。胴部中に最大径をもつ。	外面 — 口縁部ヨコナデ。胴部ナメハケ。内面 — 口縁部ヨコナデ。胴部上位ナデ。	砂礫 内外 — にぶい黄褐色	胴部下位〜台部欠損。
5	土師器 瓶	口径 16.2 底径 2.8 器高 9.3	鉢形を呈し、底面よりおおむね直線的に立ち上がる。口縁部に粘土の接合痕。底面中央に焼成前穿孔あり。	外面 — 口縁部ヨコナデ。胴部タテズリ。内面 — 口縁部ヨコナデ。胴部タテナデ一部分的に横ミガキ。	砂礫 内外 — 橙色	ほぼ完形。
6	土師器 甕	口径 14.9 底径 — 器高 [12.1]	頸部から外反して一次口縁、さらに粘土を継ぎ足して二次口縁をつくる。口縁部に粘土の接合痕。胴部中に最大径をもつ。	外面 — 口縁部に指頭圧痕あり。胴部ナメズリ。内面 — 口縁部ヨコズリ。胴部ナメズリ。	砂礫、赤色粒 内外 — 明赤褐色	口〜胴部下位3/4残存。
7	土師器 壺	口径 (14.8) 底径 — 器高 [6.8]	球状に大きくふくらむ胴部。直線的に開く口縁部〜頸部。口縁部に粘土の接合痕。胴部中に最大径をもつとみられる。	外面 — 口縁部ヨコナデ。頸部タテハケ〜一部タテナデ。胴部上位ヨコナデ。内面 — 口縁部〜頸部ヨコナデ。	砂礫、赤色粒 内外 — 橙色	口縁部〜胴部1/3残存。
8	土師器 壺	口径 (13.6) 底径 — 器高 [5.9]	球状に大きくふくらむ胴部。直線的に開く口縁部〜頸部。口縁部に粘土の接合痕。胴部中に最大径をもつとみられる。	外面 — 口縁部ヨコナデ。頸部タテナデ。内面 — 口縁部〜頸部ヨコナデ。	砂礫 内外 — にぶい黄褐色	口縁部〜胴部1/3残存。
9	土師器 埴	口径 (6.8) 底径 — 器高 [7.0]	頸部から口縁部にかけて大きく開く。口縁部が最大径となり、胴部は半球状を呈する。	外面 — 口縁部ナメハケ〜ナメミガキ。頸部ヨコミガキ。胴部上位タテハケ。中位ナメナデ。内面 — 口縁部・胴部ミガキ。頸部ナデ。	砂礫 内外 — にぶい黄褐色	胴部上位以上の1/3残存。
10	土師器 埴	口径 (8.8) 底径 3.0 器高 7.3	頸部から口縁部にかけてやや内彎し、わずかに開きながら立ち上がる。口縁部が最大径となり、胴部は丸くふくらむ。	外面 — 口縁部ヨコナデ。頸部以下ナメナデ。内面 — 口縁部〜頸部ヨコナデ。胴部以下ナメナデ。	砂礫、赤色粒 内外 — にぶい橙色	1/4欠損。
11	土師器 埴 または鉢	口径 — 底径 4.0 器高 [5.5]	丸くふくらむ胴部。	外面 — ナメナデ。内面 — ナメナデ。	砂礫 内外 — 褐灰色	胴部中位〜底部残存。
12	土師器 鉢	口径 (8.6) 底径 2.7 器高 6.6	無頸壺に類する形状。口唇部がわずかに外屈する。胴部中に最大径をもつ。	外面 — 口縁部ヨコナデ。胴部上半ナメハケ〜ナメミガキ。胴部下半ナメナデ。内面 — 口縁部ヨコナデ。胴部以下ナメナデ。	砂礫 内外 — にぶい橙色	1/3欠損。
13	土師器 鉢	口径 9.6 底径 4.7 器高 3.9	体部から口縁部にかけてやや内彎しながら開く。口縁部最大径をもつ。	外面 — おおむねヨコナデ。内面 — 口縁部ヨコミガキ。体部以下ナメミガキ。	砂礫 内外 — にぶい橙色	胴部中位から底部残存。
14	土師器 鉢	口径 (7.6) 底径 2.2 器高 3.3	体部から口縁部にかけて弧状に内彎しながら開く。口縁部に最大径をもつ。丸底。	外面 — 口縁部ヨコナデ。体部以下おおむねヨコミガキ。内面 — 口縁部ヨコナデ。体部以下おおむねヨコミガキ。	砂礫、赤色粒 内外 — 褐灰色	1/3欠損。

表3 S1-01 出土遺物観察表 (3)

No.	器種	法量 (cm)	形態・成形手法の特徴	調整手法の特徴	胎土・色調	備考
15	土師器 高坏	口径 (27.2) 底径 13.8 器高 14.3	口縁に向けてやや内彎しながら大きく開く坏部。下に向けてわずかに外反しながら開く脚部。脚部中位に焼成前穿孔3か所。	外面 - 口縁部ヨコナデ。坏部タテナデ→下位を除きタテミガキ。脚部タテナデ→下位にヨコナデ。内面 - 口縁部ヨコナデ。坏部タテミガキ。脚部タテナデ→下位にヨコナデ。	砂礫 内外 - 橙色	1/3 欠損。
16	土師器 高坏	口径 11.3 底径 - 器高 [6.8]	半球状を呈する坏部。	外面 - おおむねヨコナデ。 内面 - おおむねヨコナデ。	砂礫、赤色粒 内外 - ぶい橙色	杯部の3/4残存。

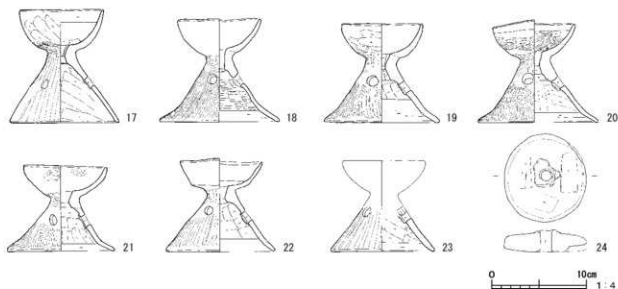


図14 S1-01 出土遺物 (3)

表4 S1-01 出土遺物観察表 (4)

No.	器種	法量 (cm)	形態・成形手法の特徴	調整手法の特徴	胎土・色調	備考
17	土師器 器台	口径 (8.0) 底径 (10.4) 器高 10.8	口縁部に向けてやや内彎しながら開く器受部。脚部は下に向けてほぼ直線的に開くが、わずかに外へふくらむ。器受部脚へ脚部に貫通孔あり。部上位に焼成前穿孔3か所。	外面 - 坏部ナナメナデ。脚部タテナデ。内面 - 坏部ナナメナデ。脚部ナナメナデ。	砂礫 内外 - ぶい黄橙色	1/2 残存。
18	土師器 器台	口径 7.8 底径 11.2 器高 9.8	口縁部に向けてやや内彎しながら開く器受部。脚部は裾部においてわずかに外屈する。器受部脚へ脚部に貫通孔あり。脚部上位に焼成前穿孔3か所。	外面 - 器受部ナデ。脚部ナデ→タテミガキ。内面 - 器受部ナデ。脚部ヨコナデ→裾部を除きヨコハケ。	砂礫、赤色粒 内外 - 赤褐色 内 - ぶい黄褐色	ほぼ完形。
19	土師器 器台	口径 7.6 底径 10.6 器高 9.5	口縁部に向けてやや内彎しながら開く器受部。脚部は裾部においてわずかに外屈する。器受部脚へ脚部に貫通孔あり。脚部上位に焼成前穿孔3か所。	外面 - 器受部ヨコナデ。脚部ナデ→タテミガキ。内面 - 器受部ナデ。脚部ナデ→裾部ヨコナデ。	砂礫、赤色粒 外 - 明赤褐色 内 - ぶい黄褐色	器受部 1/3 欠損。
20	土師器 器台	口径 2.8 底径 11.2 器高 12.7	口縁部に向けてやや内彎しながら開く器受部。脚部は裾部においてわずかに外屈する。器受部脚へ脚部に貫通孔あり。脚部上位に焼成前穿孔3か所。	外面 - 器受部ナデ→ヨコミガキ。脚部ナデ→タテミガキ。内面 - 器受部ミガキ。脚部ナデ→裾部ヨコナデ。	砂礫、赤色粒 内外 - 橙色	完形。

表5 S1-01 出土物観察表 (5)

No.	器種	法量 (cm)	形態・成形手法の特徴	調整手法の特徴	胎土・色調	備考
21	土師器 器台	口径 7.8 底径 9.8 器高 8.2	口縁部に向けてやや内彎しながら開く器受部。脚部は裾部においてわずかに外屈する。器受部脚～脚部に貫通孔あり。脚部上位に焼成前穿孔3か所。	外面－器受部ナデ→ヨコミガキ。脚部ナデ→タテミガキ。内面－器受部ミガキ。脚部ナデ→裾部ヨコナデ。	砂礫、赤色粒 内外一にふい黄褐色	口縁部と裾部をわずかに欠損。
22	土師器 器台	口径 7.9 底径 10.1 器高 8.5	器受部下位で内屈し、口縁部に向けて直線的に開く。脚部は下に向けてほぼ直線的に開く。器受部脚～脚部に貫通孔あり。脚部上位に焼成前穿孔3か所。	外面－器受部ナデ。脚部ナデ→タテミガキ。内面－器受部ナデ。脚部ナデ→裾部ヨコナデ。	砂礫 内外一褐色	器受部1/2欠損。
23	土師器 器台	口径 — 底径 9.6 器高 [4.1]	下に向けてほぼ直線的に開く脚部。上位に焼成前穿孔3か所。	外面－脚部タテミガキ。内面－脚部ナデ→裾部ヨコナデ。	砂礫、赤色粒 内外一にふい褐色	脚部の3/4残存。
24	土製品 紡錘車	直径 8.0cm、厚さ 2.1cm、重さ 113.72g、孔径 0.9cm。 穿孔部分周辺の表面が剥落。全面にナデ。				

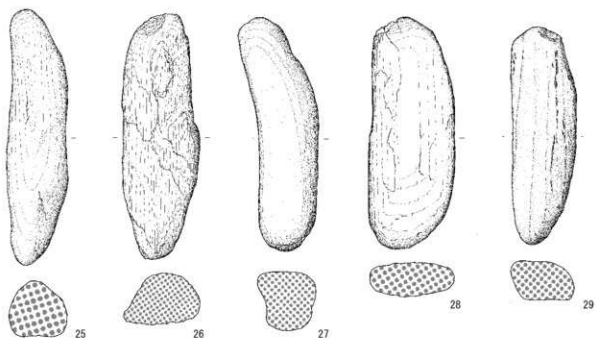


図15 S1-01 出土遺物 (4)

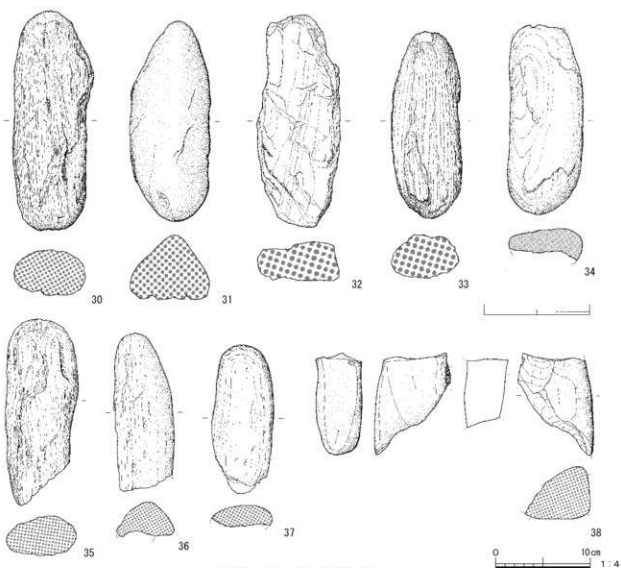


図 16 S1-01 出土遺物 (5)

表 6 S1-01 出土遺物観察表 (6)

No.	種類	器種	法 量 (cm・kg)				備考	
25	石製品	磨 礪 石	長さ: 24.3	幅: 5.8	厚さ: 5.2	重さ: 5.30	石材: 緑泥片岩	ほぼ完形。
26	石製品	磨 礪 石	長さ: 23.2	幅: 7.3	厚さ: 4.9	重さ: 5.83	石材: 緑泥片岩	ほぼ完形。
27	石製品	磨 礪 石	長さ: 22.3	幅: 6.0	厚さ: 5.6	重さ: 5.78	石材: 緑泥片岩	ほぼ完形。
28	石製品	磨 礪 石	長さ: 21.9	幅: 8.2	厚さ: 3.3	重さ: 4.60	石材: 緑泥片岩	ほぼ完形。
29	石製品	磨 礪 石	長さ: 20.6	幅: 6.2	厚さ: 3.7	重さ: 3.95	石材: 緑泥片岩	ほぼ完形。
30	石製品	磨 礪 石	長さ: 20.7	幅: 7.5	厚さ: 4.3	重さ: 4.38	石材: 緑泥片岩	ほぼ完形。
31	石製品	磨 礪 石	長さ: 18.9	幅: 7.6	厚さ: 6.1	重さ: 6.43	石材: 不明	ほぼ完形。
32	石製品	磨 礪 石	長さ: 20.0	幅: 7.8	厚さ: 3.7	重さ: 5.43	石材: 緑泥片岩	ほぼ完形。
33	石製品	磨 礪 石	長さ: 17.7	幅: 6.5	厚さ: 4.1	重さ: 3.74	石材: 緑泥片岩	ほぼ完形。
34	石製品	磨 礪 石	長さ: 17.9	幅: 6.9	厚さ: [2.3]	重さ: 2.73	石材: 緑泥片岩	1/2 残存。
35	石製品	磨 礪 石	長さ: [18.9]	幅: 7.3	厚さ: 4.0	重さ: 3.80	石材: 緑泥片岩	1/3 残存。
36	石製品	磨 礪 石	長さ: [16.0]	幅: 6.0	厚さ: [3.3]	重さ: 3.35	石材: 緑泥片岩	1/2 残存。
37	石製品	磨 礪 石	長さ: [15.1]	幅: 6.2	厚さ: [2.1]	重さ: 1.55	石材: 緑泥片岩	1/2 残存。
38	石製品	磨 礪 石	長さ: 9.8	幅: 7.1	厚さ: 5.2	重さ: 0.44	石材: 不明	

S1-02 (図17～22、表7 / 写真図版6・7)

本住居跡は、Ⅲ区北側、G-3・4、H-3・4グリッドにかけて検出された。住居跡北側の覆土上層をSD-09～11に、西側住居壁及び床面をSK-04によってそれぞれ切られているが、遺存状態は良好である。

覆土上層の暗褐色土および暗茶褐色土(1・1'・2'層)には鉄分凝集粒が観察され、一定の滞水した状況による影響が予想されるものである。

本住居跡は、S1-01と同様の火災住居である。覆土下位の4・5層には炭化物小片と同粒子、および焼土粒子が多量に含まれ、さらに下位の6・7、9・10層には中量の炭化材と炭化物小片、同粒子、および焼土粒子が少量ないし微粒含まれる。8層には炭化物小片と同粒子が多量に、11・11'層には焼土粒子が多量に含まれるといった状況であった。これらの夾雑物の多寡に注目するならば、上位から下位に炭化材および炭化物と同粒子、焼土粒子の混在が多量・少量・多量という順で互層をなしている状況を指摘できよう。壁際の8層の堆積状況に注目すると、この土層は不安定な角度をなしている。S1-01と同じく、これはきわめて短期間のうちに堆積が完了したことを示すものである。

また、本住居跡については、S1-01と比較して炭化材の遺存が良好であることを指摘できるものの、住居中央部にはほとんど認められず、住居跡内の外縁部に遺存する傾向が顕著である。このことは、住居跡中央部に発火ないし出火点が求められ、家屋・屋蓋構造体が焼尽・崩壊後、住居跡外縁部は焼尽していない状況であったことを物語っている。こうした状況をもたらす要因としては、降雨による鎮火あるいは無酸素状態が想起され、あるいは火災崩落とともに埋没した可能性も挙げることができる。これらの状況から土層の堆積を復元すると、出火による住居屋蓋部および壁材の焼失からなる8・11・11'層の堆積とともに、壁体・外部構造体(6・7・9・10層)の崩壊流入による屋蓋構造体の埋没鎮火、そしてさらなる家屋・屋蓋構造体の崩落に伴う4・5層の堆積といった経過が推定される。

確認面における規模は南北約5m60cm、東西約4m92cm、深さは約36～45cmを測る。壁はやや角度をもつものの、直線的に立ち上がる。上面プランは南北軸がやや長い方形を呈する。主軸方位はN-27°-Wを示す。

主柱は4本であり、各壁構内側の立ち上がりから約80～90cmの位置に住居跡対角線上に配されている。平面プランは円形ないし楕円形を呈し、掘り方の直径は床面において45cm前後を測り、深さは60cm前後を測る。断面形は、下位ほど狭くなる逆三角形を呈する。本住居跡もS1-01と同様、主柱下端部の遺存が期待されたため、完掘写真の撮影後、基本土層の観察とあわせてSPC-C'、D-D'ラインを設定し、断ち割り掘り下げを試みた。

床には、貼り床(13層)が施されている。すべての貼り床において掘り下げ・確認は行っていないものの、主柱穴断ち割り断面の観察においては、外縁部のみを掘削し住居跡中央を掘り残す状況が看取された。床面の状態は平坦であり、比較的良好に踏み固められていた。

壁溝は、住居跡南側中央から貯蔵穴の位置する南西コーナー一部を除いて巡るものと思われる。壁溝の外側下端から内側上端の幅は10cm前後を、深さは床面から2～7cmを測り、やや不規則である。壁溝の複数箇所には、半円状に突出する部分が認められた。この突出部の底面は、壁溝底面より一段高いものであり、壁体構造にかかる支柱の痕跡と思われる。

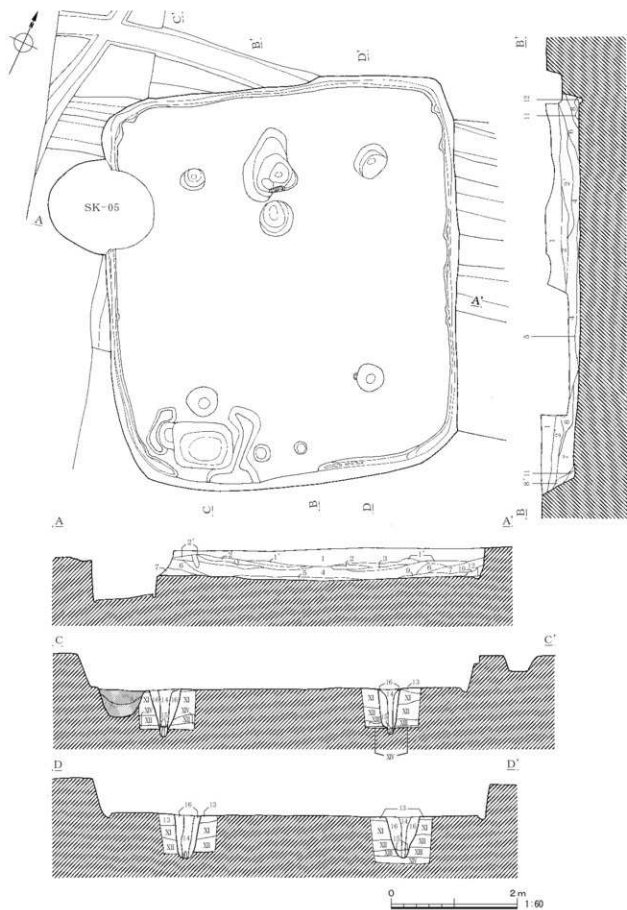


圖 17 S1-02 平面・断面圖

S1-02 土層説明

- | | | | |
|----------|--|-----------|--|
| 1 暗褐色土 | 小砂利を多量に含み、鉄分の凝集を斑点状に含む。しまりは硬く、粘性あり。 | 9 褐色土 | 炭化材を中量、焼土粒・炭化物粒を少量均一に含み、鉄分を含む。しまりは普通で粘性あり。 |
| 1' 暗褐色土 | 組成は1に類似するが、小砂利の含有量が少ない。 | 10 茶褐色土 | 炭化材を中量、炭化物粒を均一に、焼土を微量含み、褐色土を少量含む。しまりは普通で粘性あり。 |
| 2 暗茶褐色土 | 炭化物粒を少量、橙色粒子を微量含む。しまりは普通で粘性あり。 | 11 明黒褐色土 | 焼土粒を多量に、炭化物粒を少量含む。しまりは普通で粘性あり。 |
| 2' 暗茶褐色土 | 小砂利を少量、炭化物粒を微量含み、鉄分の凝集を斑点状に含む。しまりは普通で粘性あり。 | 11' 暗茶褐色土 | 組成は11に類似するが、色調が明るい。 |
| 3 明黒褐色土 | 小砂利・炭化物粒を均一に、焼土粒を微量含む。しまりは普通で粘性あり。 | 12 暗褐色土 | 炭化物粒を少量含み、鉄分の凝集を多量に含む。しまりは普通で粘性あり。 |
| 4 黒褐色土 | 炭化物粒を多量に、焼土粒を均一に、小砂利を微量含む。しまりは普通で粘性は強い。 | 13 明茶褐色土 | 暗褐色土・明茶褐色土の混在する層。鉄分の凝集(～2mm)・小礫(～1.5mm)を少量含む。しまりは硬く、粘性は強い。貼り床。 |
| 5 暗茶褐色土 | 焼土粒・炭化物粒・炭化材の小片を多量に含む。しまりは普通で粘性あり。 | 14 暗褐色土 | 焼土粒(～0.1mm)を微量、炭化物粒子(～0.5mm)を多く含む。しまりはやや軟らかく、粘性は強い。 |
| 6 暗茶褐色土 | 炭化材を中量、小砂利を少量、炭化物を微量含む。しまりは硬く、粘性は強い。 | 15 明黒褐色土 | 粘質で小礫(～2mm)を少量含む。しまりはなくぶよぶよしている。 |
| 7 茶褐色土 | 炭化材を中量、小砂利を少量、焼土粒・炭化物粒を微量含み、鉄分を斑点状に含む。しまりは硬く、粘性あり。 | 16 明褐色土 | 灰白色土を斑点状に少量含む。砂粒(～0.1mm)を微量、鉄分凝集粒(～2mm)を中量含む。しまりは硬く、粘性は強い。 |
| 8 茶褐色土 | 炭化物粒・炭化材を多量に、焼土を少量含む。しまりは普通で粘性あり。 | | |
| 8' 茶褐色土 | 焼土粒を均一に、炭化物粒を少量含み、鉄分を少量 | | |

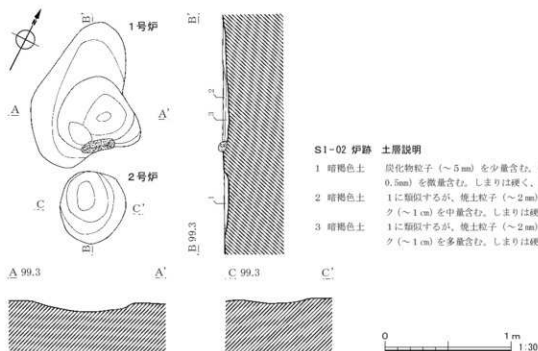


図18 S1-02 炉跡平面・エレベーション図

梯子ピットは、壁溝の及ばない住居跡南壁中央において、壁下端より約25cmの位置に2本、南壁に平行する状態で検出された。プランは円形を呈し、深さは西側が約35cm、東側が8cmを測る。

地床炉は、住居跡の北側、住居主軸上に並ぶように主柱穴間の中央で1基、またこの南側で1基検出された。以下、北側のものを1号炉、南側のものを2号炉と呼称する。

1号炉は不整形を呈し、南北方向での長さが1m1cm、東西方向での最大幅は76cm、深さは最深部で8cmをそれぞれ測る。掘り込みは南側に最深部をもち、外縁部が徐々に浅くなり床面へと続く。

南側の最も落ち込む部分が著しく被熱し、焼土ブロックが発達していた。この部分以外において、被熱面の発達は顕著ではなかった。

本住居跡南側の立ち上がり部分には、住居主軸に直行するように炉石が設置されていた。この炉石は棒状の円礫であり、表面には被熱による葉脈状のひびが生じていた。またこの炉石の表裏両面には、研磨によると思われる平滑面が認められた（図 22-6、長破線内）。この平滑面の成因を「砥石としての使用」に求めれば、転用の可能性が考えられよう。その位置関係から調理などに関する行為により生じたものとするならば、当該期の地床炉における炉石の性格や調理法などを検討するうえで注目される資料となりうる。

2号炉はほぼ円形を呈し、径約 47～49 cm、深さ 6 cm を測る。覆土に炭化物粒子および焼土粒子

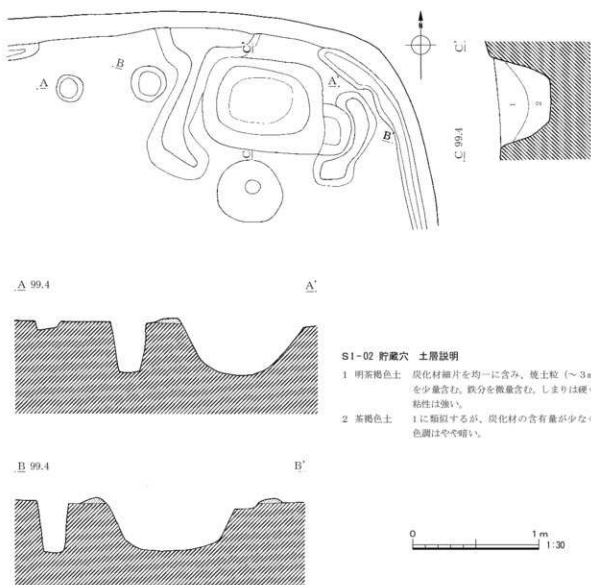


図 19 S1-02 貯蔵穴平面・断面図

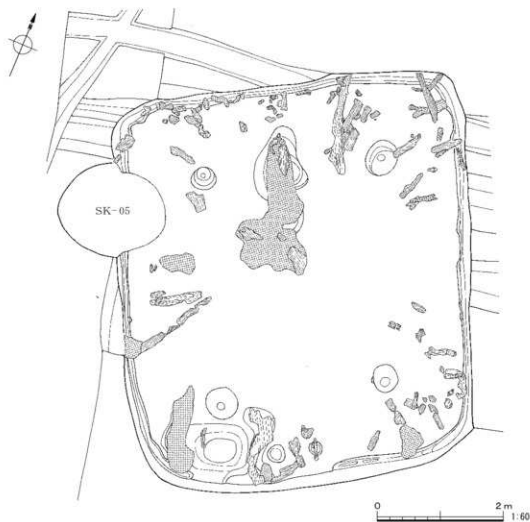


図20 S1-02 炭化材出土状況図

の混入が認められたものの、被熱面の顕著な発達は見られなかった。また、これらの地床炉からは遺物は検出されなかった。

貯蔵穴は、住居跡南西コーナー部に検出された。平面プランは隅丸方形を呈し、一部北西部分に張り出しをもつ。低部は平坦で緩やかに壁に至る。壁はやや角度をもって立ち上がる。張り出し部は床面より約4cm低く、底部は平坦である。規模は長辺84cm、短辺60cm、床面からの深さは35cmを測る。周囲に、暗褐色土と明灰褐色土の混土層からなる一段高い土堤が巡っている。この土堤は全周しておらず、主柱付近には存在しなかった。東側は住居壁に接してやや幅広く、一部貯蔵穴南辺に回り込む。ここから梯子ビットを避けるように貯蔵穴東辺に沿ってのび、その先端は「L」字状に曲がる。西側は、張り出し部を取り囲むように巡っている。高さは4cm前後、幅20～34cmを測る。

遺物は南西に寄って分布しており、小型甕形土器が覆土下位から正位状態で、小型鉢形土器が底面から検出された。

本住居跡からは、比較的少量の炭化材が検出された。垂木に相当すると思われる10cm前後の炭化材が、住居の外側から中心部へと放射状に、住居内に落ち込む形で検出された。これらの炭化材は、丸木状のものと半裁状のものが認められたが、加工によるものか生焼けのものが腐食した結果半

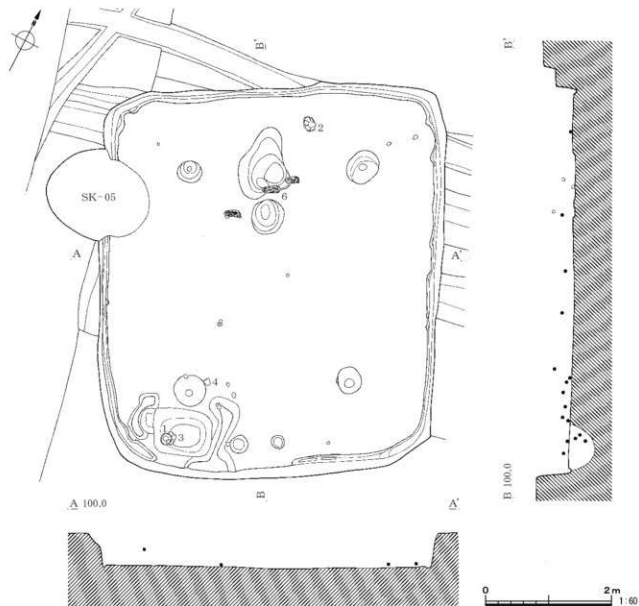


図21 S1-02 遺物出土状況図

裁状に遺存したかは判別できなかった。家屋・屋蓋構造の倒壊方向から、火災の進行が復元できるとともに、倒壊・崩落し、遺存する炭化材の形状について、以下のような想定ができよう。すなわち、遺存する炭化材の形状は、類焼の進度との関係で変化することが考えられる。円柱状の部材の場合、燃焼が部材半分までおよび倒壊した場合は円弧面を床面側にした炭化材が、さらに部材全体に燃焼が進行した場合、丸木状の炭化材が遺存することが予想される。このことから、円弧面を床面側にした炭化材が半裁状に加工された可能性はあるものの、上位半分の部材が腐食した結果として半裁状に遺存することも十分考えられる。これに対し、円弧面が上側に遺存する炭化材は、あらかじめ半裁状に加工されていた蓋然性が高いといえる。今後の観察の視点のひとつとして提示したい。

これら垂木と思われる炭化材の多くは住居北半部に遺存し、南東コーナー部にやや集中して検出された。また、貯蔵穴東側の周提上からは、板状の炭化材が検出された。梯子状の凹凸は認められず、貯蔵穴の蓋の可能性が考えられる。また炭化材の遺存状態から、本住居跡もS1-01と同様に、南側

から北側へと火災が進行したものと推定される。

炭化材以外の遺物は、地床炉北東部付近で胴部上半を欠損した壺形土器(ないし甕形土器)が床面付近から、1号地床炉東で棒状礫1点、2号地床炉西側で打製石鎌1点、南西に位置する主柱穴東側で坏部および脚裾部を欠損した小型高坏形土器が検出された。その他に破片資料が検出されているが、点数も少なく全体に散在的である。やや集中を見せる貯蔵穴周辺に注目すると、その出土レベルの土層は6・7層に相当し、住居壁体崩壊に伴い埋没したことが推定される。打製石鎌および棒状礫の出土レベルは、打製石鎌が1層に、棒状礫が2'層に相当する。(大熊季広)

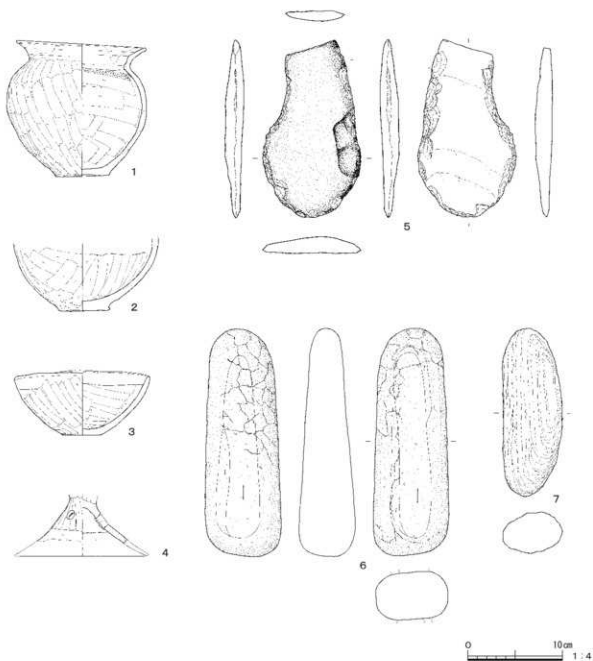


図22 S1-02 出土遺物

表7 S1-02 出土遺物観察表

No.	器種	法量 (cm)	形態・成形手法の特徴	調整手法の特徴	胎土・色調	備考	
1	土師器 甕	口径 13.6 底径 5.9 器高 14.2	頸部から口縁部にかけてくの字状に外反する。胴部中位に最大径をもつ。平底。	外面－口縁部ヨコナデ。胴部以下タテナデ。内面－口縁部ヨコナデ。胴部以下おおねヨコナデ。	砂礫 外－橙色 内－ぶい橙色	ほぼ完形。	
2	土師器 甕	口径 ー 底径 5.5 器高 (7.1)	中位に最大径をもち、大きくふくらむ胴部。平底。	外面－オナメナデ。 内面－おおねヨコナデ。	砂礫、赤色粒 内外－ぶい黄褐色	胴部下半～底部残存。	
3	土師器 鉢	口径 14.2 底径 4.1 器高 6.4	底面から口縁部にかけてゆるやかに内彎しながら開く。	外面－口縁部ヨコナデ。体部以下オナメナデ。内面－口縁部ヨコナデ。体部以下オナメナデ。	砂礫、赤色粒 外－橙色 内－灰色	完形。	
4	土師器 高坏	口径 ー 底径 ー 器高 (5.4)	下に向けてわずかに外反しながら開く脚部。脚部中位に焼成前穿孔3か所。	外面－脚部タテナデ→下位のみヨコナデ。内面－脚部ナデ→下位のみヨコナデ。	砂礫 内外－ぶい黄褐色	胴部下位～台部2/3欠損。	
No.	種類	器種	法量 (cm・kg)			備考	
5	石製品	打製石斧	長さ: 18.0	幅: 10.3	厚さ: 1.6	重さ: 0.46	石材: 不明
6	石製品	砥石	長さ: 24.0	幅: 7.6	厚さ: 5.0	重さ: 1.86	石材: 砂岩
7	石製品	磨礪石	長さ: 17.7	幅: 6.3	厚さ: 4.4	重さ: 3.6	石材: 緑泥片岩

2 溝状遺構

SD-01 (図23～27 / 写真図版8)

本遺構は、3条の溝状遺構が一区間その走路を共有し、また分岐するものであり、新旧関係をもとに新しいものから古いものへとSD-01a、SD-01b、SD-01cと称別する。

SD-01a (図23～25 / 写真図版8)

本遺構は、1区W-8からR-13グリッドにわたり検出されたが、S-11・R-12においては掘削が確認面に及ばなかったものと思われ、この区間は未検出である。SD-01b、04～07を切っている。

確認面での幅は68cm～18cm、底面の幅は42cm～19cmを測り、南西から北東にいくにつれ狭くなる傾向が認められる。確認面からの掘り込みは非常に浅く、底面までの深さは8cmを測る。底面の標高は、最高値である1区W-7グリッドの調査区西壁において99.85m、最低値であるQ-12で99.51mを測る。

本遺構は、先述のように重複関係においてSD-01bを切っている。この先行するSD-01b、3区V-6グリッドの調査区西壁における土層観察で、浅間山系A軽石降下前に形成された基本土層第III層より掘削されていること、また同溝跡覆土にも浅間山系A軽石が含まれていること、さらに本跡の覆土に浅間山系A軽石が含まれることから、近世後半～近代の所産であろう。

SD-01b (図23-24、26 / 写真図版8)

本遺構は、3区Y-7から2区J-8グリッドにわたり検出された。SD-01aに切られ、SD-04～07を切っている。確認面での幅は、1m40cm～60cm、底面の幅は1m8cm～19cmを測る。

1区P-9からN-9グリッドまでの範囲においては、本遺構の幅が広がる傾向が見られる。この区間では、西側の底面から立ち上がりにかけて、長径数cm～約20cmの礫が検出された。

底面の標高は、最高値である3区V-6グリッドの調査区西壁において99.90m、最低値である

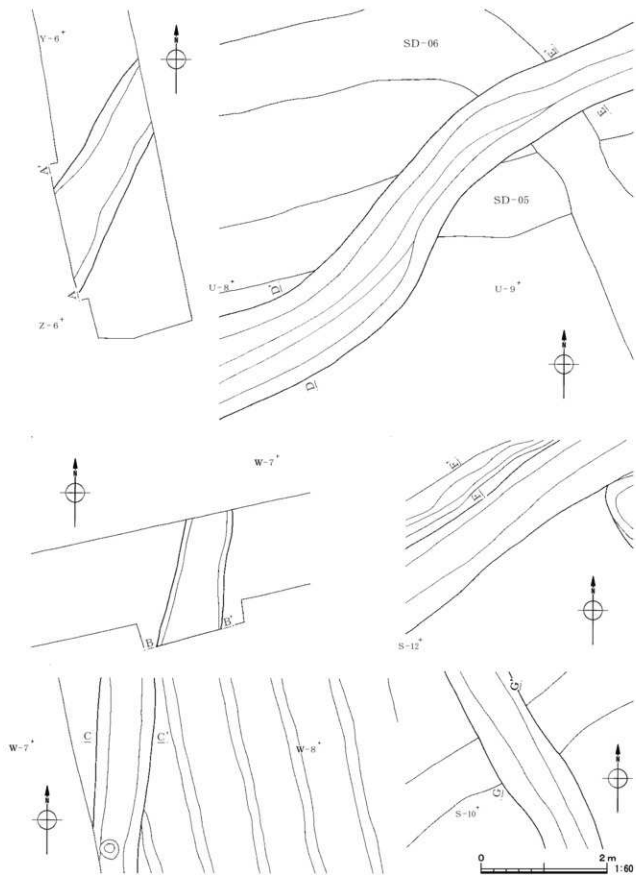


图 23 SD-01 a·b·c 平面图 (1)

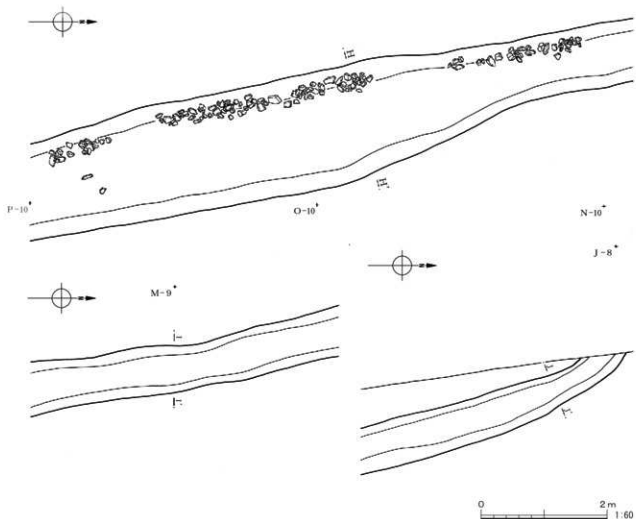
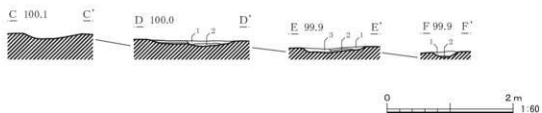


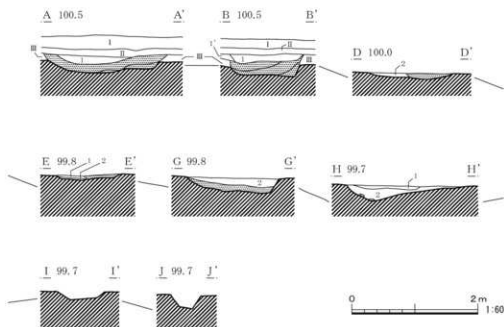
図24 SD-01 a・b・c平面図(2)



SD-01a 土層説明

- | | |
|--|---|
| <p>1 暗褐色土 暗褐色土を主体とし、浅間山系テフラ (A s-A ~1mm)・ローム粒子 (~1mm)・焼土粒子 (~0.5mm)・炭化物粒子 (~1cm) を少量含む。しまりは硬く、粘性はやや弱い。</p> | <p>2 暗褐色土 1に類似するがローム粒子がやや多い。しまりは硬く、粘性はやや弱い。</p> |
| <p>3 茶褐色土 砂利・白色火山灰粒・酸化鉄粒子などを均質に含む。しまりは普通で粘性はない。</p> | |

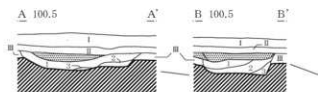
図25 SD-01a断面・エレベーション図



SD-01b 土層説明

- | | |
|---|--|
| <p>1 暗灰褐色土 ローム粒子（～1mm）を多量に、浅間山系テフラ（A s-A、～1mm）・砂粒（石英多、～0.5mm）を微量含む、しまりは硬く、粘性はない。</p> <p>1' 暗灰褐色土 炭化物粒を多量に、浅間山系テフラ（A s-A）・鉄分</p> | <p>2 暗茶褐色土 を微量含む、しまりは軟らかく、粘性あり。
ローム粒子（～2mm）・暗褐色土粒子（～2.5mm）・砂粒（石英多、～0.5mm）を中量浅間山系テフラ（A s-A、～1mm）を少量含む、しまりは硬く、粘性は弱い。</p> |
|---|--|

図 26 SD-01b 断面図



SD-01c 土層説明

- | | |
|---|--|
| <p>1 暗茶褐色土 炭化物粒・火山灰粒を均一に、鉄分を少量含む。しまりは普通で粘性あり。</p> <p>2 灰褐色土 炭化物粒・鉄分を均一に、火山灰粒を微量含む、し</p> | <p>3 茶褐色土 まりは普通で粘性あり。
砂粒・鉄分を均一に、炭化物粒を微量含む、しまりは硬く、粘性あり。</p> |
|---|--|

図 27 SD-01c 断面図

2区 J-7グリッドの調査区西壁で99.27 m、両者の比高差は63cmを測る。本遺構の時期は、SD-01aに先行すること、また覆土の底面に浅間山系A軽石を含むことなどから、近世後半以降と考えられる。

SD-01c (図23・24、27 / 写真図版8)

本遺構は、3区 Y-7グリッドの調査区西壁、および同区 W-7の調査区南壁における土層観察により確認され、その他の土層観察においては本跡覆土に対応する土層は見られなかった。SD-01aに切られている。

3区 Y-7グリッドの調査区西壁、および同区 W-7の調査区南壁における上端および底面の幅は、それぞれ1 m 70cm・60 cm、94cm・82cmを測る。3区 Y-7グリッドの調査区西壁における底面の標高は99.79 m、W-7の調査区南壁における底面の標高は99.73 mを測り、両者の比高差は6 cmを測る。本遺構の覆土には浅間山系A軽石が含まれず、また、掘削が浅間山系A軽石降下以前に形成されたⅢ層上面よりなされていることから、近世前半以前の所産であろう。

本遺構が上記の2地点においてのみ観察されていることから、SD-01bとの関係についてふれておく。後述のように、SD-05-06の掘削がⅢ層下およびⅣ層であることから、未発掘区部分において、SD-01bの走路からはずれ、SD-05ないし06に至ると推定することは、土壌の形成を加味すれば全くの可能性を否定するものではないが、困難を要するであろう。ここでは、その走路をSD-01bに沿うものと推定し、SD-01bの覆土が同走路における再掘削であり、勾配の関係から3区付近においてはこの再掘削がSD-01cに及ばなかったため遺存したものと解釈したい。このことから、こ

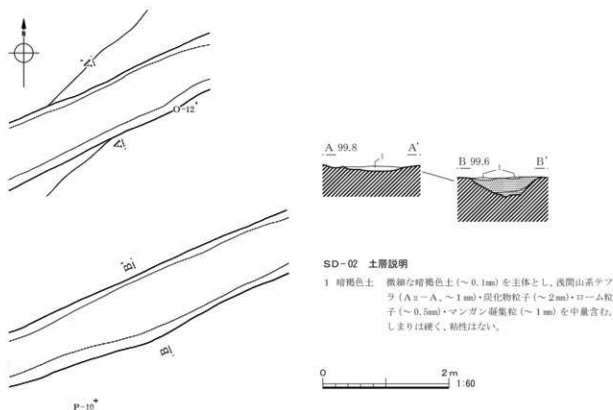


図28 SD-02 平面・断面図

これらの溝状遺構は、詳細な時期の比定は困難であるが、浅間山系A軽石の降下を前後して比較的長期にわたり維持・管理され機能したものと推定される。

SD-02 (図28 / 写真図版9)

本遺構は、2区P-10からN-13グリッドにわたり検出された。SD-04を切っている。

確認面での幅は、最大で約97cm、底面の幅は72cmを測る。立ち上がりは緩やかであり、底面は全体に平坦であるが、北側においてやや深い傾向が認められる。SD-01bとの距離は76cmを測る。

底面の標高は、最高値である2区P-10グリッドにおいて99.54m、最低値である同区N-12グリッドの調査区東壁で99.41mを測り、両者の比高差は13cmを測る。

調査区壁面における土層観察がなされておらず、また出土遺物がないことから、本遺構の時期比定は困難であるが、覆土に浅間山系A軽石が含まれるものの純層状の堆積をなさないことから、浅間山系A軽石降下による機能停止の可能性は低いものと思われる。その開鑿時期は、近世後半前後と推測される。

SD-03 (図29)

本遺構は、2区R-11からグリッドQ-14にかけて検出された。確認面での幅は最大で78cm、底面の幅は48cmをそれぞれ測る。R-11グリッド付近では底面が一段落ち込み、ここでは底面幅が21cmとやや狭くなっている。

底面の標高は、最高値である2区R-11グリッドにおいて99.62m、最低値であるQ-13グリッドの調査区東壁で99.51m、両者の比高差は11cmを測る。

出土遺物がないことに加え、調査区壁面における土層観察がなされていないことにより、掘削面の層位的な検討および本遺構の時期比定は困難であるが、覆土に混入する浅間山系A軽石の状態から、SD-02と同様、その開鑿時期を近世後半前後に求められるであろう。

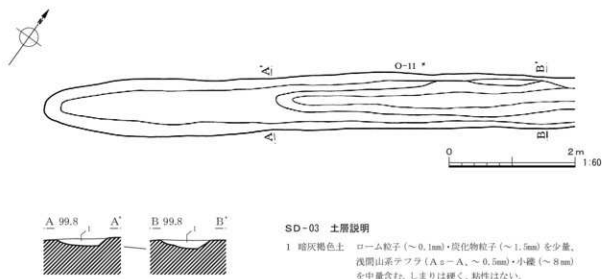


図29 SD-03 平面・断面図

SD-04 (図30・31 / 写真図版9)

本遺構は、3区U-5から2区N-13グリッドにわたり検出された。重複関係はSD-01・02およびSK-01に切られ、SD-05・06を切っている。

確認面での幅は、最大で約1m9cm、底面の幅は38cmを測る。立ち上がりは直線的であり、底面は全体に平坦である。底面の標高は、最高値である3区U-5グリッドの調査区西壁において99.61m、最低値である2区N-12グリッドの調査区東壁で99.12mを測り、両者の比高差は49cmを測る。覆土最下層・底面には凝集した鉄分が層をなし、恒常的な流水が推定される。

本跡の時期は、覆土最上位の1層に浅間山系A軽石が含まれず、同テフラ降下時には埋没を完了している。また同層には白色火山灰粒が観察され、このテフラは層位的には浅間山系B軽石である可能性が考えられる。しかしながら、遺物による検討ができないことから、ここでは本遺構の開鑿が古代に遡る可能性を指摘するにとどめたい。

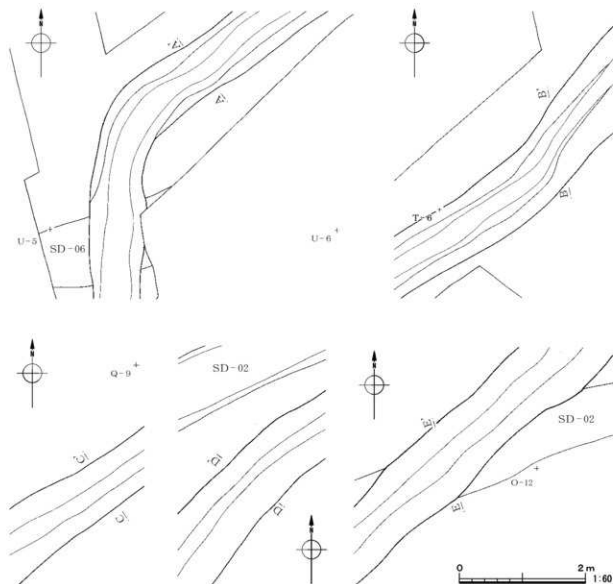
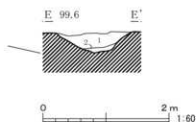
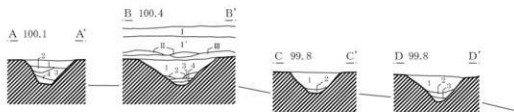


図30 SD-04 平面図



SD-04 土層説明

- 1 暗青褐色土 白色火山灰粒・炭化物粒を均一に、小砂利を少量含み、鉄分凝集粒を斑状に含む。粘質土に近い。しまりは硬く、粘性は強い。
- 2 暗青褐色土 1に類似するが白色火山灰粒を含まず、鉄分凝集粒を多量に含む。ほとんど粘土化している。
- 3 明黒褐色砂利 細かい砂粒が主体であり酸化鉄が層を成して沈着、堆積している。しまりは普通で粘性はない。
- 4 暗茶褐色砂 黒色の砂利を主体とし、鉄分凝集粒が多く含まれる。しまりは普通で粘性はない。

図31 SD-04 断面図

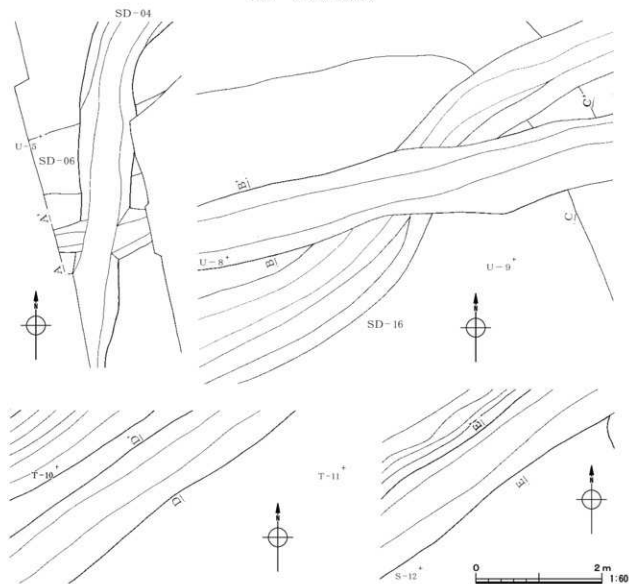


図32 SD-05 平面図

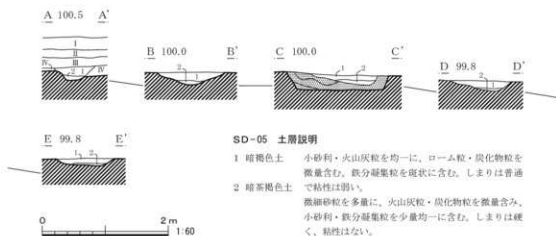


図 33 SD-05 断面図

SD-05 (図 32-33)

本遺構は、3区U-7から2区Q-14グリッドにわたり検出された。SD-01a・01b、SD-04およびSK-03に切られ、SD-06を切っている。

確認面での幅は平均1m～1m10cmであるが、2区西壁側では約1m74cmを測り、広がる傾向を見せている。底面の幅は、平均55cmである。覆土2層は微細な砂粒を多量に含み、かつ鉄分の凝集が発達していることから、恒常的な流水が推定されるものであり、本遺構は用水として機能したものである。

底面の標高は、最高値である3区U-7グリッドの調査区西壁において99.68m、最低値である2区Q-14グリッドの調査区東壁で99.45m、両者の比高差は23cmを測る。

本遺構の時期は、SD-04に先行することから、古代に遡る可能性が考えられる。

SD-06 (図 34-35 / 図版 10)

本遺構は、3区T-7から2区X-11グリッドにわたり検出された。SD-01a・01b、SD-04・05に切られ、SD-07を切っている。

確認面での幅は最大で約1m34cm、底面の幅は65cmを測る。立ち上がりは直線的であり、底面は全体に平坦である。U-5およびT-5～8グリッドにかけては自然地形の傾斜におおむね直交し、T-9～X-11グリッドにおいては等高線に沿う形でその走路をとっている。覆土の堆積状況からは、部分的に再掘削された箇所が観察され、これらの部位の各埋没土層に時期差が見られることから、比較的長期にわたる維持・管理が推定される。

底面の標高は、最高値である3区T-7グリッドの調査区西壁において99.59m、最低値である2区X-11グリッドの調査区南壁では99.45m、両者の比高差は14cmを測る。

本遺構の時期は、浅間山系A軽石降下以前に形成された基本土層より掘削がなされていること、また重複関係から、古代に遡る可能性が考えられる。

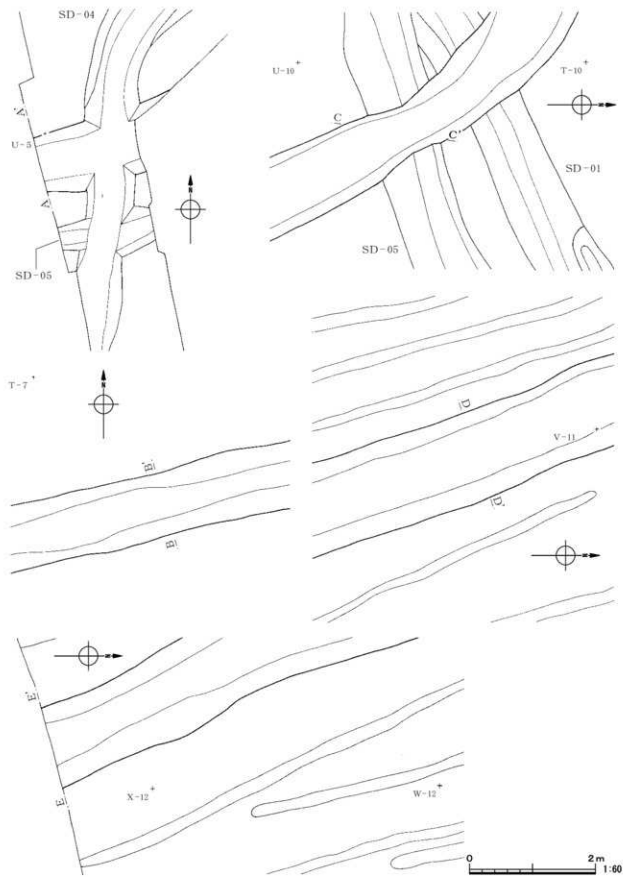


圖 34 SD-06 平面圖

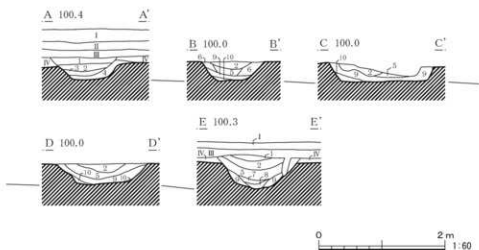


図35 SD-06 断面図

SD-06 土層説明

- | | | | |
|---------|--|---------|--|
| 1 暗茶褐色土 | 白色粒子・火山灰粒を少量含む。しまりは普通で粘性は弱い。 | 6 茶褐色土 | 白色粒子を少量均一に、砂粒・炭化物粒を微量含む。色調は少々橙色がかっている。しまりは普通で粘性あり。 |
| 2 暗橙褐色土 | 白色粒子を少量、砂粒を微量含み、金属サビを多量に含む。しまりは普通で粘性あり。 | 7 茶褐色土 | 火山灰粒・白色粒子を少量含む。しまりは硬く、粘性は強い。 |
| 3 明黒褐色土 | 白色粒子を均一に含み、最下部に鉄分の凝集が多量に見られる。しまりは硬く、粘性強い。 | 8 暗茶褐色土 | 砂粒を少量均一に、白色粒子を微量含む。しまりは普通で粘性は弱い。 |
| 4 黒色土 | 小砂粒を均一に、白色粒子を微量含み、鉄分凝集粒を少量含む。しまり普通で、粘性は強い。 | 9 暗茶褐色土 | 白色粒子を均一に、砂粒・炭化物粒を微量含む。しまりは硬く、粘性は弱い。 |
| 5 茶褐色土 | 火山灰粒・小砂粒を少量均一に、炭化物粒・白色粒子を微量含む。しまりは硬く、粘性あり。 | 10 暗褐色土 | 砂粒を多量に、炭化物粒を微量含む。しまりは普通で粘性は弱い。 |

SD-07 (図36~38 / 写真図版11)

本遺構は、2区 T-9 から P-14 グリッドにわたり検出された。SD-01a・01b および SD-06 に切られている。

確認面での幅は 1 m 2 cm、底面の幅は 64 cm を測る。立ち上がりは緩やかな弧を描き、底面は中央

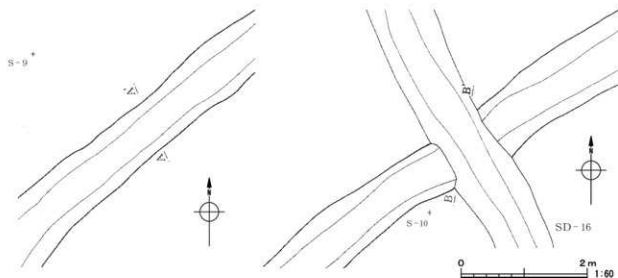


図36 SD-07 平面図(1)

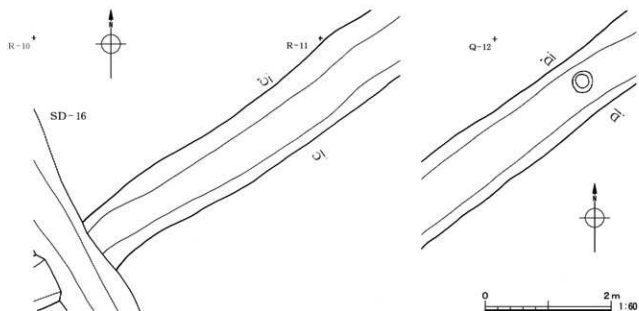


図37 SD-07 平面図(2)

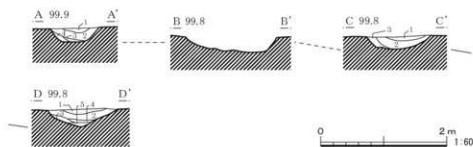


図38 SD-07 断面・エレベーション図

SD-07 土層説明

- | | |
|--|---|
| <p>1 暗茶褐色土 白色粒子(0.3~0.5mm)を少量均一に、小砂粒を微量含む。しまりは普通で粘性あり。</p> <p>2 明黒褐色土 白色粒子・赤色スコリア・片岩小片(5~10mm)を少量含む。しまりは普通で粘性は弱い。</p> <p>3 明黒褐色土 土質は2に類似するが、片岩小片は含まず砂を微量</p> | <p>4 暗茶褐色土 白色微粒子を少量均一に、片岩小片を微量含む。しまりは軟らかく、粘性は弱い。</p> <p>5 明黒褐色砂利 砂利・小礫主体の層。鉄分の凝集を少量含む。しまり、粘性共にない。</p> |
|--|---|

部がやや下がる傾向を見せる。

底面の標高は、最高値である2区 T-9グリッドのSD-06交点において99.58m、最低値である2区 P-14グリッドの調査区東壁では99.38mを測り、両者の比高差は20cmを測る。

重複関係、すなわち古代に遡る可能性のあるSD-06に先行することから、同様の時期に開墾されたものと推定される。

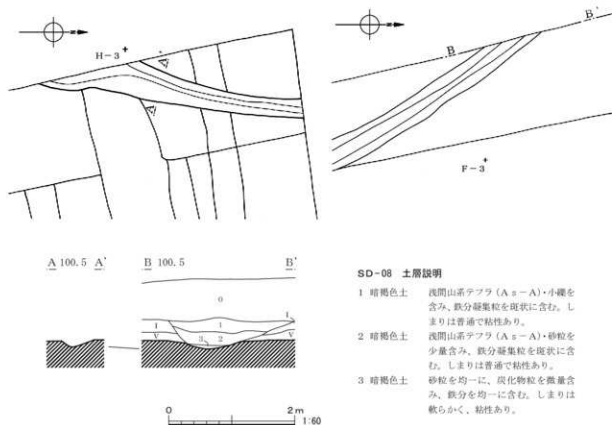


図 39 SD-08 平面・断面図

SD-08 (図 39)

本遺構は、3区E-2からH-2グリッドにわたり検出された。SD-09～11を切っている。

確認面での幅は約40cm、底面の幅は18cmを測る。第3区E-2グリッド調査区西壁においては立ち上がり上端幅1m74cmを測る。

底面の標高は、最高値である3区H-2グリッドの調査区西壁において99.44m、最低値である同区E-2グリッドの調査区西壁においては99.40m、両者の比高差は4cmを測る。

本遺構の時期については、基本土層の1層より掘削がなされていることから、近世後半～近代と考えられる。

SD-09 (図 40)

本遺構は、3区G-2グリッドからG-3グリッドにわたり検出された。S1-02およびSK-05を切っている。確認面での幅は約69cm、底面の幅は27cmを測る。

底面の標高は、最高値である3区G-3グリッドにおいて99.58m、最低値である同区G-3グリッドにおいては99.52m、両者の比高差は6cmを測る。

調査区壁面による土層観察がなされておらず、また遺物も検出されなかったことから、本遺構の時期比定は困難であるが、覆土中に浅間山系A軽石が含まれないことから、近世前半以前に遡る可能性が考えられる。

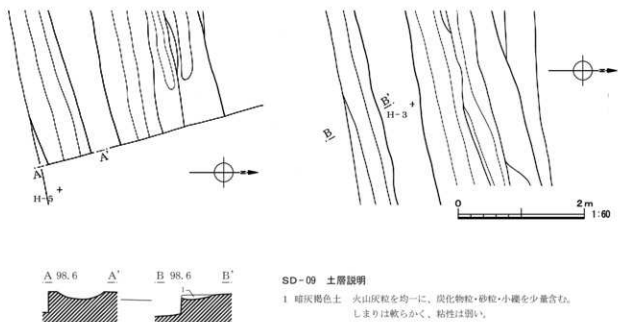


図 40 SD-09 平面・断面図

SD-10 (図 41/写真図版 11)

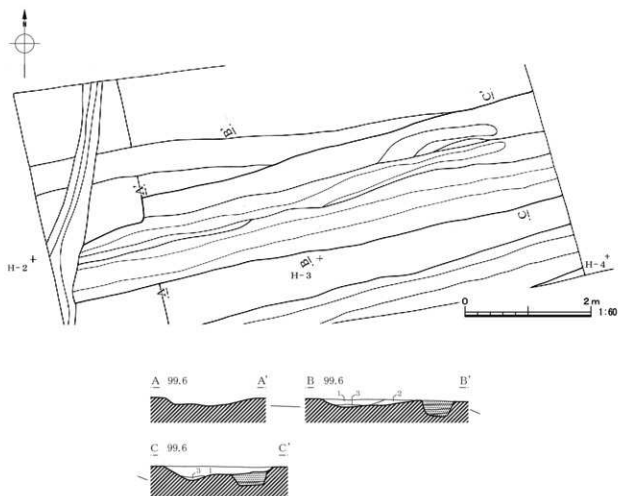
本遺構は、3区 H-3 から H-4 グリッドにわたり検出された。SD-08 に切られ、S I-02 および SD-11 を切っている。

本遺構は、3 条の溝状遺構が経時的に累積した、もしくは共時的に存在したものととらえることができるものであり、それぞれの底面のレベルは、北側のものほど高位にあり、南側へ移るにつれ低位となる。

確認面での幅は 1 m 60 cm、底面の幅は、明瞭な最南部のもので 28 cm を測る。土層の断面においては切り合い関係でとらえられる部位が観察され、経時的な前後差と、走路の移動が認められる。他の部分では、明瞭な切り合い関係の認められないような土層堆積状況を示し、共時的に機能していた部位を有していたことを物語っている。また、覆土は砂粒を主体とし、下層に鉄分が顕著に凝集していることから、用排水路として機能したものと思われ、かつその流路を分かť分水点であったものと推定される。

最南部の、底面が明瞭にとらえることのできる箇所のレベルは次のとおりである。最高値である 3 区 H-4 グリッドにおいて 99.44 m、最低値である同区 H-3 グリッドにおける SD-08 交点で 99.16 m、東から西へと高低差をもち、両者の比高差は 28 cm を測る。その他の中段および上段としてとらえられるものはほぼフラットであり、調査区内において比高差を見いだすことはできない。ともあれ、比高差と等高線の関係という点で、傾斜が等高線に逆行していることは、本遺構の性格と周辺の土地利用を考えるうえで注意すべきである。

本遺構の時期について、覆土上層に浅間山系 A 軽石が含まれないことから、同テフラの降下時にはすでに機能を停止していたものと思われる。



SD-10 土層説明

- | | |
|--|---|
| <p>1 暗灰褐色土 砂粒を均一に、炭化物粒を微量含み、明褐色土を斑点状に含む。しまりは普通で粘性は弱い。</p> <p>2 暗灰褐色土 砂粒を多量に含み、鉄サビを斑点状に含む。しまり</p> | <p>3 暗褐色土 鉄分を多量、炭化物粒・橙色粒子を微量含む。しまりは普通で粘性あり。</p> |
|--|---|

図 41 SD-10 平面・断面図

SD-11 (図 42/写真図版 11)

本遺構は、3区 H-3 から G-4 グリッドにわたり検出された。SD-08、10 に切られ、S1-02 および SK-05 を切っている。

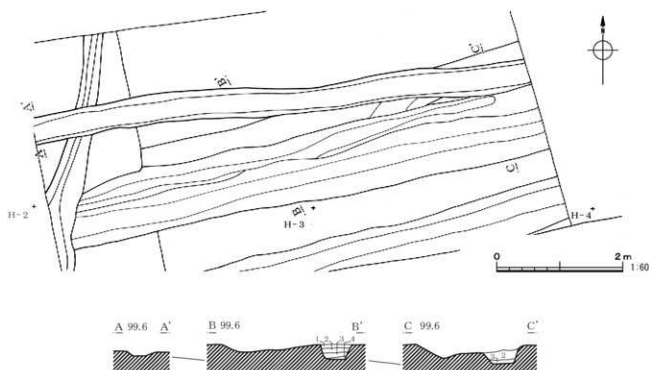
確認面での幅は約 43 cm、底面の幅は 29 cm を測る。底面は平坦で、立ち上がりは直線的である。

底面の標高は、最高値である 3区 H-3 グリッドにおいて 99.38 m、最低値である同区 H-4 グリッドの調査区西壁で 99.16 m を、両者の比高差は 28 cm を測る。

覆土は全体的に砂粒を多く含み、鉄分が顕著に凝集していることから、用排水路として機能した

ものと指定される。SD-10とあわせて土層観察により、同時期に分水路として機能していた可能性が考えられる。

本遺構の時期について、覆土上層部に浅間山系A軽石を含まないことから、同軽石降下時にはその機能を停止していたものと推測される。



SD-11 土層説明

- | | |
|--|---|
| <p>1 暗灰褐色土 白色粒子・橙色粒子を少量含み、鉄分凝集粒を斑点状に多量に含む。しまりは硬く、粘性は弱い。</p> <p>2 暗褐色土 砂粒を主体とし、鉄分凝集粒・明褐色土を均一に斑点状に含む。しまりは普通で粘性はない。</p> | <p>3 明黒褐色土 砂粒を多量に、炭化物粒を少量含み、鉄分凝集粒を含む。しまりは普通で粘性あり。</p> <p>4 暗緑褐色土 少々粘質で沈泥の様な色調を示す。炭化物粒を少量、白色粒子を微量含む。</p> |
|--|---|

図 42 SD-11 平面・断面図

SD-12 (図 43 / 写真図版 11)

本遺構は、3区Q-5グリッドで検出された。確認面での幅は約30cm、底面は22cmを測る。深さは最深で20cmを測り、掘り込みは比較的浅いといえよう。底面は平坦であり、立ち上がりは直線的である。

底面の標高は、3区Q-5グリッドの調査区西壁において最高値99.80m、同区東壁で最低値99.78mを測り、両者の比高差は2cmと、調査区内において明瞭な比高差を認めることはできない。

本遺構の時期は、覆土中に浅間山系A軽石を含まないこと、また掘削が基本土層第のⅢ層中ないし同層下よりなされていることから、近世前半以前に比定される。

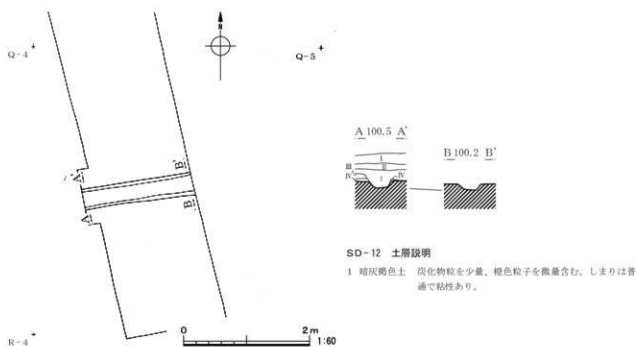


図 43 SD-12 平面・断面図

3 土 坑

SK-01 (図 44 / 写真図版 12)

本遺構は、2区東側中央のやや北寄り、O-11グリッド東側で検出された。SD-04を切る。

平面プランは長方形を呈し、底面は東側が深い。壁は角度をもって直線的に立ち上がる。規模は長軸 92 cm、短軸 46 cm、最深 11 cm を測り、主軸方位は $N-66^{\circ}-E$ を示す。

西側からの埋没土の流入が認められるが、自然埋没か人為的埋め戻しかは判別できなかった。出土遺物はなく厳密な時期判定はなしえないが、覆土全層に浅間山系 A 軽石を含むこと、また重複関係にある浅間山系 A 軽石を含む SD-04 を切っていることから、近世後半以降の所産と考えられる。

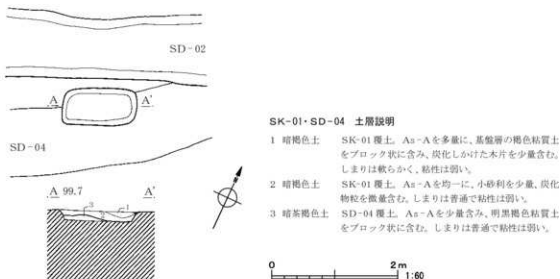


図 44 SK-01 平面・断面図

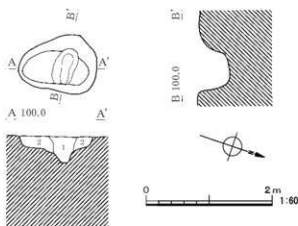
SK-02 (図45)

本遺構は、2区南側中央、T-11グリッド中央で検出された。

平面プランは不正楕円形を呈し、底面は中央部が長軸に直行する形で一段下がる長楕円形の落ち込みを有する。壁は、急角度で立ち上がる。規模は長軸1m6cm、短軸最大幅79cm、最深35cm、テラス部13～16cmを測る。主軸方位はN-14°-Wを示す。

覆土は基本土層に対応する層のない、明黒褐色土および黒褐色土で構成されている。これらの土層は、SK-03(五領期)の覆土に類似するものである。最終埋没土である1層が垂直に近い角度をなすことから、木材などの埋置が推定され、2層は人為的埋め戻しの可能性が高いものである。

遺物が検出されなかったため、厳密な時期の比定は困難であるが、五領期もしくはその前後の所産であろう。



SK-02 土層説明

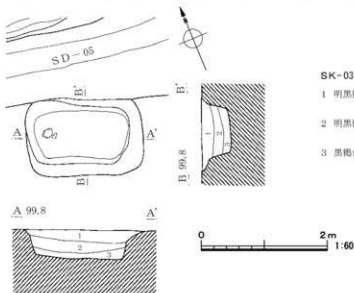
- 1 黒褐色土 砂利・白色火山灰粒(1～2mm)を多量かつ均一に、小礫を少量含む。しまりは硬く、粘性は弱い。
- 2 明黒褐色土 組成は1に類似するが砂利の含有量がより少なく色調がやや明るい。しまりは硬く、粘性は弱い。

図45 SK-02 平面・断面図

SK-03 (図46・47/写真図版12)

本遺構は、2区東側中央南寄り、R-13グリッド東側で検出された。SD-05に切られる。

平面プランは長方形を呈し、底面は平坦である。壁は、下位～中位において直線的に、やや角度



SK-03 土層説明

- 1 明黒褐色土 砂質で砂利・小礫を多量に、白色粒子(0.5～1mm)を中量均一に含む。しまりは硬く、粘性は弱い。
- 2 明黒褐色土 砂利・白色粒子を中量均一に含む。1に比べ砂を多く含む。しまりは強く、粘性は非常に強い。
- 3 黒褐色土 ほとんど砂質で白色粒子を均一に、砂利を少量含む。橙褐色の土を斑点状に少量含む。しまりは普通で粘性はない。

図46 SK-03 平面・断面図

をもち、上位はさらに斜行して立ち上がる。規模は、長軸1 m 39 cm、短軸1 m 8 cm、深さ38 cmを測る。主軸方位N-70°-Wを示す。

覆土は、明黒褐色土および黒褐色土で構成されている。基本土層において、これらに対応する土はない。全層おおむね水平に堆積している。壁付近に三角堆積が認められず、掘削後一定期間開口した状況下で見られる壁の風化崩落がなく、短期間のうちに埋没したものであろう。

西側の底面において、五領期の外面刷毛目調整の甕形土器が出土している。

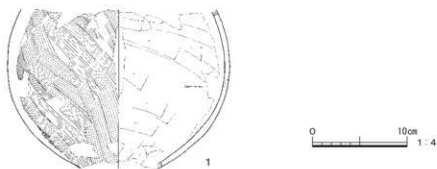


図 47 SK-03 出土遺物

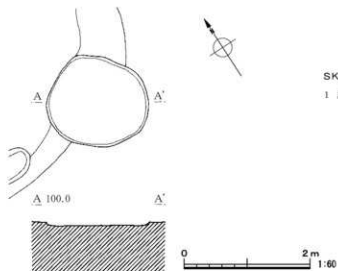
表 8 SK-03 出土遺物観察表

No.	器種	法量 (cm)	形態・成形手法の特徴	調整手法の特徴	胎土・色調	備考
1	土師器 甕	口径 - 底径 - 器高 [16.0]	中位に最大径をもち、大きくふくらむ胴部。	外面 - ナナメハケ。内面 - ナナメナグ。	砂礫 内外 - 浅黄色	胴部 1/6 残存。

SK-04 (図 48)

2区西側中央北寄り、Q-8グリッド北西寄りで検出された。SX-01(土層捻転跡)を切っている。

平面プランは不整楕円形を呈し、底面は平坦である。壁は角度をもって立ち上がる。規模は長軸1 m 38 cm、短軸1 m 22 cm、深さ3~4 cmを測る。主軸方位N-57°-Wを示す。覆土は黒褐色であり、SK-03に類似するものである。



SK-04 土層説明

- 1 黒褐色土 炭化物粒・白色微粒子 (0.5~1 mm) を均一に、基盤黒褐色土を現状に少量含む。しまりは軟らかく、粘性は弱い。

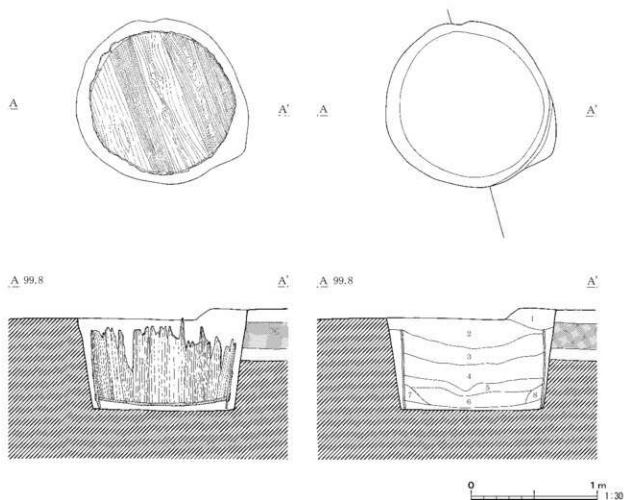
図 48 SK-04 平面・エレベーション図

SK-05 (図49 / 写真図版12・13)

3区北側H-3グリッド北寄りで検出された。SD-09に切られ、SI-02を切っている。

本遺構からは、桶が設置された状態で検出された。掘り方の平面プランはやや不整な円形を呈し、底面は平坦である。壁は角度をもって立ち上がる。規模はセクションラインでの上面径1 m 19 cm、底面径約1 m、深さ約70 cmを測る。底板長軸の主軸方位は、おおむねN-32°-Wを示す。

覆土上位の1・2層に、浅間山系A軽石を含む。4～8層には、同軽石が含まれていない。3層は、桶設置後に充填された土層である。(大熊季広)



SK-05 土層説明

- | | |
|--|---|
| <p>1 暗灰褐色土 A_s-Aを均一に、小砂利を微量、鉄分を少量含む。しまりは普通で粘性あり。</p> <p>2 灰褐色土 A_s-A・炭化物粒子・小礫を微量含む。鉄分を少量含む。しまりは軟らかく、粘性は弱い。</p> <p>3 暗灰褐色土 白色粒子を微量含む。鉄分を多量に含む。しまりは硬く、粘性は強い。掘り方充填土。</p> <p>4 灰褐色土 炭化物粒子・橙色粒子を微量含む。鉄分を均一に含む。色調はより褐色が強く、しまりは普通で粘性あり。</p> | <p>5 暗灰褐色土 炭化物粒子を微量含む。鉄分を多量に、白色粘土粒を微量含む。しまりは硬く、粘性は強い。</p> <p>6 褐色土 鉄分を均一に含む。最下層に帯状に凝集している。色調は褐色を帯び、しまりは硬く、粘性は強い。</p> <p>7 茶褐色土 炭化物粒子を微量含む。鉄分を斑点状に均一に含む。しまりは普通で粘性あり。</p> <p>8 暗茶褐色土 鉄分の凝集を多量に含む。しまりは普通で粘性あり。</p> |
|--|---|

図49 SK-05 平面・断面図

V まとめ

今回の調査により、旧赤根川上流域の沖積低地中の微高地に占地する、古墳時代前期集落の一端が明らかとなった。該期2軒の竪穴住居跡は、調査区北側の西寄りから検出されているものである。本調査区と北側の田端地区の台地面の間は、比高差1mを測る一段低い沖積低地となっていること、さらに調査区第1区S I-01北東側が標高を急激に減じることから、本報告S I-01・02が集落域最北東部として捉えられよう。

本遺跡周辺の該期の遺跡に目を向けると、南西約500～600m、赤根川上流部に相当する沖積低地にミカド・ミカド西遺跡が所在する。これらの遺跡もまた沖積低地中の微高地に占地しており、該期の住居跡はミカド遺跡では単独で1軒、ミカド西遺跡では3軒検出されている。ミカド遺跡の場合は調査区中央西側からの検出であり、その周辺に該期の住居跡は検出されていない。ミカド西遺跡の場合、第1・3号住居跡は重複関係かあるいは住居址間が近接することから2時期にわたる可能性が指摘できるものである。ミカド遺跡のさらに南側の、旧赤根川を挟んで対峙する丘陵端部には、弥生時代後期から古墳時代前期にかけて営まれた方形周溝墓群および2軒の五領期の竪穴住居跡が検出された塩谷下大塚遺跡が所在している。また田端南堂遺跡の北西約400mの台地上には、田端中原遺跡(平成3年 児玉町遺跡調査会調査)が所在し、該期の竪穴住居跡7軒が調査されている。これらの住居跡の内の2軒は、居址間が近接すること、また住居の主軸方位から2時期ないし3時期に亘るものと推定され、同時期に2～3軒の住居が営まれたものと考えられる。

これらの周辺の遺跡の様相から、旧赤根川上流域の古墳時代前期集落は、女堀川中～下流域における同時期の、浅見境北遺跡や後張遺跡、地神遺跡のような大規模な集落ではなく、短期或いは数時期に亘っても数軒単位の小規模な集落である傾向が指摘でき、田端南堂遺跡の該期集落も同様の集落であったことが考えられる。

(大熊孝広)

引用・参考文献

- 岩瀬 謙 (1998) 『地神／塔頭』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第193集
- 駒宮史朗他 (1973) 『枇杷橋遺跡』埼玉県遺跡調査会発掘調査報告書第20集
- 恋河内昭彦 (1990) 『塩谷下大塚遺跡』児玉町文化財調査報告書 第11集
- 恋河内昭彦 (1997) 『城の内・日延・東田・浅見境北遺跡』児玉町文化財調査報告書第23集
- 恋河内昭彦 (2005) 『後張遺跡Ⅲ』児玉町遺跡調査会報告書 第20集
- 坂本和俊他 (1981) 『金屋遺跡群』児玉町文化財調査報告書 第2集
- 笹森 健一 (1981) 『埋蔵文化財の調査(Ⅲ)』郷土資料 第26集 上福岡市教育委員会
- 立石 盛詞 (1983) 『後張』埼玉県埋蔵文化財発掘調査事業団報告書第26集
- 徳山寿樹他 (1981) 『児玉町田端中原遺跡の調査』『第25回 遺跡発掘調査報告会 発表要旨』埼玉考古学会他

写真図版



遺跡遠景 (1)

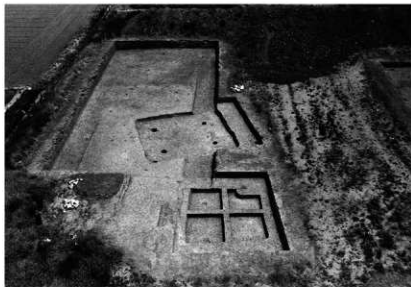


遺跡遠景 (2)



遺跡全景 南西から

写真図版 2



1区全景 西から



2区全景 南西から



2区全景 北西から



1・3区全景 北西から



2・3区全景 北西から



S1-01 東から

写真図版 4



S1-01 北東から



S1-01 遺物出土状況 北から



S1-01 遺物出土状況(拡大) 北から



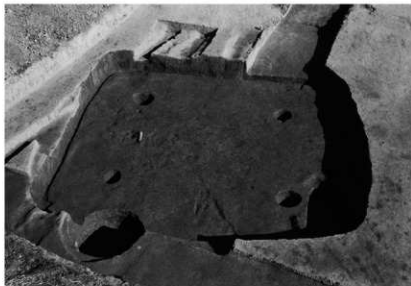
S1-01 遺物出土状況 南東小5



S1-01 炭化材出土状況 北小5



S1-01 P4 南東小5



S1-02 南西より



S1-02 炉跡 南東より



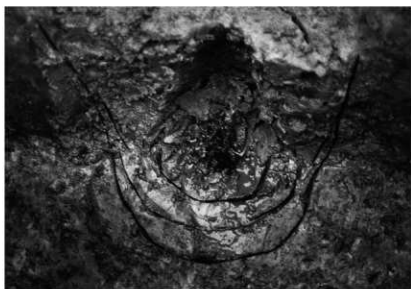
S1-02 遺物出土状況 西より



S1-02 貯蔵穴 西6・5



S1-02 炭化材 西6・5



S1-02 P3 土層断面 南東6・5

写真図版 8



SD-01 (1) 北5-6



SD-01 (2) 南5-6



SD-01 (3) 南東5-5



SD-02 西から



SD-04 (1) 北東から



SD-04 (2) 南西から



SD-06 (1) 西から



SD-06 (2) 北から



SD-06 (3) 東から



SD-07 南西から



SD-10・11 西から



SD-10・11・12 東から



SK-01 北から



SK-03 北から



SK-05 (1) 北から



SK-05 (2) 北6-5



畑作跡 北6-5



表土除去作業 南6-5



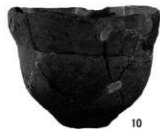
作業風景 (S1-01) 南東から



作業風景 (S1-02) 南西から



作業風景 (S1-02) 北西から



S1-01 出土遺物 (1)



13



14



15



16



17



18



19



20



21



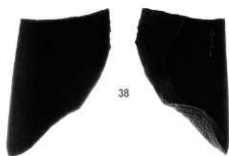
22



23



24



S1-01 出土遺物 (3)



S1-02 出土遺物

報告書抄録

ふりがな	たばたみなみどういせき							
書名	田端南堂遺跡							
副書名	児玉郡酪農業協同組合集送乳・牛乳処理施設建設工事並びに道路改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書							
巻次								
シリーズ名	本庄市遺跡調査会報告書							
シリーズ番号	第28集							
編著者名	太田博之 大熊季広 和久拓照							
編集機関	本庄市遺跡調査会							
所在地	〒367-8501 埼玉県本庄市本庄3丁目5番3号 本庄市教育委員会内 電話0495-25-1185							
発行年月日	西暦2010(平成22)年9月30日							
ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード		北緯 °'″	東経 °'″	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
たばたみなみどういせき 田端南堂遺跡	さいたまけんほんでょうし 埼玉県本庄市 こどもまよりおほみどろ 児玉町大字田端 おぼろみどろ 字南堂235他	112119	54-325	36°11'24″	139°07'07″	1994.01.28 } 1994.05.13 ----- 1994.10.13 } 1994.12.02	985.9㎡	工場建設関連 道路改良 工事
所収遺跡	種別	主な時代		主な遺構		主な遺物	特記事項	
田端南堂遺跡	集落跡	古墳時代前期 奈良・平安時代以降 中世～近世 近世～近代 時期不明		竪穴住居跡 2軒 土 坑 2基 溝状遺構 4条 溝状遺構 5条 土 坑 1基 溝状遺構 5条 土 坑 1基 土 坑 1基		土師器・炭化材		

本庄市遺跡調査会報告書 第28集

田端南堂遺跡

児玉郡酪農協同組合集送乳・牛乳処理施設建設工事
並びに道路改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

平成22年9月20日 印刷

平成22年9月30日 発行

発行／本庄市遺跡調査会

〒367-8501 埼玉県本庄市本庄3丁目5番3号

本庄市教育委員会内

電話 0495-25-1185

印刷／山進社印刷株式会社